

16 院内各部署の業務実績

院内各所属一覧（掲載ページ）

	ページ	所 属		ページ	所 属
診 療 部	48	内科統括	看 護 部	104	看護部長室
	50	糖尿病・内分泌・血液内科		109	外来
	51	呼吸器内科		111	手術室
	52	消化器内科		113	中央材料室
	54	腎臓内科		114	I C U（集中治療室）
	56	神経内科		115	3 B病棟
	58	精神神経科		116	4 A病棟
	59	循環器内科		117	4 B病棟
	61	心臓血管外科		118	5 A病棟
	63	小児科		119	5 B病棟
	65	外科		120	6 A病棟
	67	整形外科		121	6 B病棟
	68	形成外科		122	7 A病棟
	69	脳神経外科		123	7 B病棟
	71	皮膚科	124	3 C病棟	
	72	泌尿器科	事 務 部	125	病院経営課
	74	産婦人科		126	病院総務課
	76	眼科		127	医事課
	78	耳鼻咽喉科		129	地域医療連携センター
	79	放射線科		132	医療安全対策室
81	麻酔科	134		院内感染対策室（I C T）	
診 療 技 術 部	82	病理診断科			
	83	歯科口腔外科			
	84	手術管理科			
	85	非常勤医師			
	87	臨床研修医			
	88	臨床検査科			
	90	中央放射線科			
	92	臨床工学科			
	94	リハビリテーション科			
	96	栄養科			
99	医療技術科				
102	薬剤科				

■内科統括

1 診療の概要

消化器内科、呼吸器内科、腎臓内科、糖尿病・内分泌内科、血液内科、神経内科などの内科系診療科がそれぞれ専門性の高い診療を行うと同時に、相互に協力しながら内科全般の多様な疾患を網羅する診療を行った。

2 令和元年度の診療実績

(1) 診療体制の充実

- ・内科病床 182 床で入院診療を行い、病床利用率は 96.2%を維持した。
- ・外来ブースが造設され、10 診療室での診療が可能となった。
- ・リウマチ・膠原病内科非常勤医師による診療を継続した（毎週金曜日）。
- ・新型コロナウイルス感染症に対して呼吸器内科を中心に内科系診療科が連携して診療する体制を整えた。

(2) 内科の医局会とカンファレンス

- ・内科医局会、診療部長・病棟長会議、早朝カンファレンスを継続した。

3 研修・教育

(1) 診療参加型臨床実習（クリニカルクラークシップ）

- ・消化器内科に東京慈恵会医科大学より 7 名を受け入れた。
- ・糖尿病・内分泌・血液内科に聖マリアンナ医科大学より 2 名を受け入れた。

(2) 初期臨床研修

- ・管理型：10 名を受け入れた。
- ・協力型：腎臓内科に沼津市立病院より 2 名を受け入れた。

(3) 後期臨床研修

- ・基幹施設として専門研修プログラム「富士市立中央病院内科専門研修プログラム」を登録した。
- ・連携施設として「東京慈恵会医科大学附属病院内科専攻医研修プログラム」、「静岡県立総合病院内科専門研修プログラム」、「国際医療福祉大学熱海病院内科専門研修プログラム」を登録した。

4 来年度の課題

(1) 診療体制の整備

- ・これまでの診療の要請に応えながら、新型コロナウイルス感染症にも対応する診療体制、対応能力を向上させる。

(2) 研修・教育体制の整備

- ・令和3年度から基幹施設として後期研修専攻医を受け入る体制を整備する

(文責 笠井 健司)

■糖尿病・内分泌・血液内科

1 スタッフ

役 職	氏 名	役 職	氏 名
診療参事	藤井 常宏	部長	安藤 精貴
副部長	山城 秀樹	専任医師	細井 紀翔
専任医師	辻本 裕紀	専任医師	末吉 剛
専任医師	平野 慧		

2 令和元年度の診療実績

(1) 外来診察（専門）

藤井医師（悪性リンパ腫、骨髄異形成症候群、自己免疫性血小板減少性紫斑病、多発性骨髄腫、急性、慢性白血病等）、安藤医師（糖尿病、内分泌疾患、妊娠糖尿病等）、山城医師（糖尿病、一般疾患）、辻本医師（糖尿病、内分泌疾患）、末吉医師（糖尿病、内分泌疾患）

(2) 地域連携室経由での紹介外来患者総数

藤井医師 166 名、安藤医師 203 名、辻本医師 219 名、末吉医師 191 名

(3) 主な患者統計（新規患者数）

	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
糖尿病	784	651	730
悪性リンパ腫	48	36	39
特発性血小板減少性紫斑病	47	51	42
骨髄異形成症候群	22	20	27
多発性骨髄腫	22	19	18

3 来年度の課題

- (1) 外来受診患者への対応：外来患者が多く、開業医からの紹介患者が増加している。富士市在住の患者が中央病院に集中している現状を踏まえ、市役所職員、富士市医師会と協力して、糖尿病病診連携ネットワークを構築している。今後とも、病診連携を行っていく上で問題点を抽出し改善していく。
- (2) 入院患者への対応：当科としては、令和元年度に新たな病棟医を 3 名迎え、新しい体制で診療を開始した。当院への糖尿病の紹介患者は、健康診断や症状自覚を契機として近隣の診療所を受診し重度の糖尿病を指摘されるケースが特に多く、初めて糖尿病の診療を開始する方々となる。初期の段階で診断すること、合併症が進行することの重大性、患者自身の病気の理解が重要であり、チーム医療を充実させるとともに富士市全体の病気への関心を高める工夫が必要である。

（文責 安藤 精貴）

■呼吸器内科

1 スタッフ

役 職	氏 名	役 職	氏 名
部長	木村 哲夫	医長	藤本 祥太
専任医師	犬養 舜		

2 令和元年度の診療実績

呼吸器内科は、一般的な肺炎から当地域に多い気管支喘息、慢性気管支炎、肺気腫といった慢性呼吸器疾患や、肺結核、肺非結核性抗酸菌症、気管支拡張症、肺がん等の診断及び治療を行っている。

気管支拡張症等による喀血に対しては、放射線科に依頼して気管支動脈塞栓術で止血処置を行っている。

また、慢性気管支炎・肺気腫・間質性肺炎等で、慢性呼吸不全状態にある患者に対しては、在宅酸素療法（HOT：Home Oxygen Therapy）を導入し、家庭での酸素投与を可能とし、生活の質の向上を図っている。

肺がんに関しては、気管支内視鏡で診断し、治療は主に静岡県立静岡がんセンター（駿東郡長泉町）と連携し、総合的な治療を目指している。

当院は静岡県東部地区で唯一結核病棟（10床）を有しており、近年再び増加しつつある結核に対しても治療を行っている。

	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
気管支内視鏡検査	57	67	75

3 来年度の課題

令和2年度も常勤医師3名による診療体制が継続可能となるため、引き続き安定した診療を行うことによって、地域医療に貢献する所存である。

（文責 木村 哲夫）

■消化器内科

1 スタッフ

役 職	氏 名	役 職	氏 名
医長	金井 友哉	医員	土屋 学
医員	青木 祐磨	医員	三國 隼人
医員	渡邊 俊宗	専任医師	田中 孝幸
専任医師	橋本 泰輔		

2 令和元年度の診療実績

東京慈恵会医科大学消化器・肝臓内科および内視鏡科から派遣された7人の常勤医師および5人の非常勤医師で診療にあたった。

入院診療に関しては、主に7B病棟で診療にあたった。

消化器内科専門外来は月から金曜日の全ての外来診察日で行い、患者数の増加を鑑みて、金曜日以外で1ブースから2ブースへ増設した。

令和元年度の内視鏡検査・治療件数は以下の表に示す。

EUS、ERCPといった胆膵内視鏡の検査・処置は豊富な症例数を維持している。

内視鏡治療

	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
内視鏡的止血術	135	119	110
胃 ESD	22	25	23
胃 EMR	4	8	6
大腸 ESD	12	17	14
大腸 EMR	240	266	291
食道 ESD	5	5	9
食道 EMR	0	0	0

胆膵検査・治療

	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
ERCP	290	464	438
EUS	130	190	202

経皮的ドレナージ

	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
PTCD	15	17	7
PTGBD	90	107	137
PTAD	5	20	19

肝癌治療

	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
RFA or PEIT	27	27	23
TACE or TAI	51	43	45

3 来年度の課題

EUS、ERCP といった胆膵内視鏡の検査・処置が前年同様に豊富な症例数であり、静岡県東部地区でも上位となる件数であった。来年度も実績を維持できるよう取り組んでいきたい。

また、外来患者数の増加を鑑み外来ブースを増設している。地域連携を深めていく。昨今の消化器診療において、幅広い消化器分野の全ての領域で高水準を維持することは容易なことではないが、慈恵医大から派遣される非常勤医師の先生方の力も借りて、富士医療圏の消化器診療は当院で完結できるよう精進していきたい。

(文責 金井 友哉)

■腎臓内科

1 スタッフ

役職	氏名	役職	氏名
部長	笠井 健司	副部長	高橋 康人
医員	土谷 千子	専任医師	加藤 一彦
専任医師	寺嶋 理沙		

2 令和元年度の診療実績

富士市 CKD（慢性腎臓病）ネットワークによる市内医療機関からの紹介に加え、市外からも多くの症例をご紹介いただいた。一方、慢性透析導入患者数は 67 人と減少したが、腎臓専門医の早期治療介入が効果を表し始めた可能性があり、今後の推移が注目される。東京慈恵会医科大学腎臓・高血圧内科よりの派遣医師が加わり、腎組織診断体制が強化されたことも朗報といえる。

	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
血液透析施行患者数	343	263	288
血液透析施行回数	2,863	2,799	2,647
腹膜透析患者数（年度末）	12	12	11

慢性透析導入患者数	96	100	67
血液透析／腹膜透析	92/0	98/2	66/1

急性血液浄化施行患者数*	55	72	65
持続血液濾過透析	44	49	47
エンドトキシン吸着	3	7	6
単純血漿交換	4	2	4
二重濾過血漿交換	2	6	5
血液吸着	0	0	0
LCAP	2	8	3

*急性血液浄化療法施行件数に関しては各科管理の症例を含む

手術件数	100	102	80
血液透析アクセス	96	97	76
腹膜透析アクセス	4	5	4
腎生検	36	35	35

CKD 紹介（透析を除く）	280	242	275
---------------	-----	-----	-----

3 来年度の課題

- (1) 待ち時間対策などにより、診療へのアクセスしやすさを向上させる。
- (2) CKD ネットワークを通して地域における腎臓病への医療提供力向上を図る。
- (3) 透析防災ネットワークを広域化し、市外の医療機関との協力を図る。
- (4) 初期・後期臨床研修、医学生の臨床実習の教育体制を整備する。
- (5) 腎臓病療養指導士の育成を推進する。

(文責 笠井 健司)

■神経内科

1 スタッフ

役職	氏名	役職	氏名
部長	河野 優		

2 令和元年度の診療実績

令和元年度は部長と非常勤医師とで外来診療を行った。

外来は、火曜日を除く月から金曜日の週4回、主に紹介制を取り、物忘れ、しびれ、歩行障害など様々な神経症状を主訴とする患者の診断、治療および経過観察を行った。

入院に関しては、新規に神経内科病棟を開設（5A病棟に10床）し、当科単独の主治医性をとり、治療を担当した。主病棟、確実な入院病床が確保でき、入院数増加並びに入院期間短縮につながった。

また平成28年度から日本神経学会・准教育施設、令和元年度から一次脳卒中センターの認定を受け、当院での研修が専門医習得につながることを確保された。

(1) 疾患別入院患者数

(人)

		平成29年度	平成30年度	令和元年度
血管障害	脳梗塞/脊髄梗塞	122	111	107
	脳出血	1	1	2
	一過性脳虚血発作	3	7	3
感染・炎症性疾患	脳炎/脳症	3	14	14
	プリオン病	1	4	2
	髄膜炎	11	6	9
変性疾患	認知症	1	3	8
	パーキンソン病関連疾患	16	36	29
	脊髄小脳変性症	0	0	0
	運動ニューロン病	4	1	8
脱髄性疾患	多発性硬化症/視神経脊髄炎	7	13	23
末梢神経障害	ギランバレー症候群	2	4	8
	慢性炎症性脱髄性多発神経炎	3	4	1
筋疾患	筋炎	4	4	6
	重症筋無力症	5	2	1
発作性疾患	てんかん/痙攣発作	22	34	22
その他		26	12	22
計		231	256	265

(2) 特殊種検査実績 (件)

	脳波	針筋電図	神経伝導速度
外来	74	14	89
入院	78	8	28

(3) 臨床調査個人票作成

神経疾患の多くは難病として特定疾患治療研究事業の対象となっており、臨床調査個人票の作成総数は新規・更新を併せて 218 件であった。

3 来年度の課題

- (1) 常勤医師の増員
- (2) 内科入院主治医との連携徹底
- (3) 神経診療の啓発、教育
- (4) 富士市難病連との交流

(文責 河野 優)

■精神神経科

1 スタッフ

役 職	氏 名	役 職	氏 名
部長	外岡 雄二		

2 令和元年度の診療実績

平成 27 年 4 月より、外来診療を再開。

- (1) 外来診療：週 4 日 ※金曜日は午前のみ、非常勤医師が診療。

対象疾患：統合失調症、気分障害、神経症、認知症、精神遅滞、てんかん、アルコール依存症、症状精神病など。

- (2) 入院患者診察：毎日。

対象疾患：当院で入院治療中の患者さんの精神症状の病状管理。不眠・不穏・不安・抑うつなど。

- (3) 外来の診療統計総計：3,556 名

月別診療数

(人)

年度\月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計
元	284	272	279	342	278	308	318	270	315	310	268	312	3,556
30	235	274	247	262	263	229	273	272	247	262	243	262	3,069
29	222	222	226	239	244	224	215	259	240	239	214	239	2,783

3 来年度の課題

当院には精神科の入院病床がないため、入院治療が必要な精神疾患患者の治療には対応できない。また、常勤医師が 1 名のため、夜間・休日の対応もできない。今年度も引き続き近隣の精神病院との連携を密にして、対応困難な患者の入院治療への対処をスムーズに行えるよう、図っていく方針である。

(文責 外岡 雄二)

■循環器内科

1 スタッフ

役 職	氏 名	役 職	氏 名
診療参事	三川 秀文(～9月)	部長	阪本 宏志
副部長	富永 光敏	医長	長谷川 潤
医長	蒔田 憲太郎	医長	増谷 祐人
専任医師	多賀 宇太郎	派遣医師	谷川 真一

2 令和元年度の診療実績

富士地区の循環器疾患の救急医療を、心臓血管外科と協力し 365 日体制で当直を配し、看護師、放射線技師、臨床工学技士、臨床検査技師と共にチーム医療で取り組んでいる。今年度は急性冠症候群に対し緊急冠動脈造影検査を 168 例に施行し、内 136 例に対して経皮的冠動脈インターベンションを施行している。また、心肺停止や心原性ショック例に対しても経皮的な心肺補助法（PCPS）や大動脈バルーンポンピング法（IABP）などの機械的補助装置を用いて積極的に救命に努力している。

検査では心臓超音波検査にて非侵襲的に弁膜症や心機能の評価ができ、多列型 X 線 CT 装置（MDCT：256 スライス）および核医学検査などで冠動脈疾患を診断することが可能である。冠動脈疾患には多枝病変を有する症例も多く、血管内超音波法（IVUS）、光干渉断層法（OCT）、冠血流予備量比（FFR）等の画像診断を併用し、病変の形態や組織性状の把握、虚血の有無等の評価し治療に取り組んでいる。

末梢動脈疾患の治療も積極的に行い、総腸骨動脈、大腿動脈、膝窩動脈以下の病変に対し計 38 例にバルーン拡張やステントを用いた血行再建術を施行し、急性疾患である急性下肢動脈閉塞にも対応している。

また、今年度は不整脈に対してアブレーション治療を 49 症例に対し施行し、新たに施設基準を取得しリードレスペースメーカー（Micra）植え込み術も施行した。

当科は日本循環器学会認定循環器専門医研修施設、日本心血管インターベンション治療学会研修施設に認定されており、循環器専門医 3 名、日本心血管インターベンション治療学会認定医 3 名、専門医 2 名、指導医 1 名を有し、学会発表も積極的に行っている。教育面では他施設から医師を招き、知識および技術の向上に勤めている。

	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
冠動脈造影	1,038	1,003	1,111
冠動脈インターベンション	482	364	414
緊急症例（治療）	229（177）	168（136）	168（136）
末梢動脈疾患	41	34	38
アブレーション		18	49
ペースメーカー植え込み術	70	58	48

3 来年度の課題

不整脈に対してのアブレーション治療医は週1回の派遣医師のため治療症例数に制限がある。当院でのアブレーション開始は、病診連携により周辺の先生方にも周知され、症例数が増え、治療までの待機期間が長いのが現状である。また、循環器内科では薬剤難治性心不全（基礎疾患は陳旧性心筋梗塞、弁膜症、心房細動、拡張型心筋症等）で入退院を繰り返す症例が増加してきた。植込み型徐細動器（ICD）と共に難治性心不全治療の心臓再同期療法（CRT）等を実施することで、循環器領域で、より積極的な治療が期待できる。そのため、医師の増員、特に不整脈医師の常勤を働きかけていきたいと思っている。

（文責 阪本 宏志）

■心臓血管外科

1 スタッフ

役 職	氏 名	役 職	氏 名
部長	田口 真吾	医長	成瀬 瞳

2 令和元年度の診療実績

当院の心臓血管外科は常勤医2名体制で、開心術と血管内治療を除く大血管および末梢血管治療を行っている。心血管系に対する手術という当科の診療内容からすれば常勤医師2名では不十分な状況が生じ、特に昨年3月までは富士在住が私一人であったため夜間・休日は実質一人体制のことが多々あった。そのため、緊急手術症例が発生しても当科の医師数が律速段階となるために他院に搬送されることが多く、正直忸怩たる思いがあった。しかし、4月より成瀬医師が富士在住で赴任したことで、夜間・休日でも緊急手術を行える最低医師数を揃えることができた。実際、成瀬医師赴任初日の4月1日と、その2日後となる3日に、それぞれ夜間帯に緊急冠動脈バイパス術を施行することができた。またゴールデンウィーク10連休中の4月30日には、救急搬送されてきた88才の急性A型解離の緊急手術を夕方より施行することができた。おそらく昨年度までの体制であれば、3例とも他院搬送になっていたと思われる。

令和元年度の手術件数の詳細は下記のとおりである。

	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
虚血性心疾患	10	8	16
弁膜症	25	18	34
不整脈	2	1	10
胸部大動脈	11	6	10
胸腹部大動脈	3	0	0
先天性心疾患	0	1	0
腹部大動脈	17	11	8
末梢血管	19	12	9
心臓腫瘍、他	0	3	2
計（重複症例あり）	87	60	89

成瀬医師赴任に際し3月後半～4月末までの約1ヶ月半は定時手術を控えたが、それでも前年と比較し2倍近い開心術を施行することができた。大学関連他施設と比較すると手術件数は圧倒的に少ないものの、当院の過去10年では最も多い件数と

なった。これは前述のとおり当科の富士在住医師数が2名となったことに加えて、昨年から引き続き夜間・休日の緊急手術時には当院OBの田中圭先生に御助力をお願いすることで、一昨年までは他院搬送を選択せざるを得ない緊急症例を原則当施設で手術する方針に切り替えられたことが大きい。また、週末や夜間におけるICU症例の上申も2名の医師の交代で対応することが可能となったため、術後管理に難渋することが予想されるような重症例も、他施設に紹介することなく積極的に手術を行うようになったことも一因となっている。一方、開胸・開腹でも手術可能ではあるが、客観的にステントグラフトによる血管内治療の方がbetterと思われる大動脈瘤症例は、20例以上を他施設に紹介した。下行大動脈以下の末梢動脈領域症例が減少傾向であることは、血管内治療を行っていない当院では時代の趨勢からはやむを得ない状況でもある。

3 来年度の課題

平成20年卒の成瀬医師は、前任地の柏病院では第一助手を行ったことがない状況であったが、『人一倍頑張ること』が美点の成瀬医師が一例一例の症例を通じてとにかく頑張ってくれた結果、形だけでも第一助手をこなせるようになってきている。しかし、当院に限らず医局関連他施設全てが欠員に近い状況で症例数を伸ばしていることを考えると、当院では心臓外科医2名だけで開心術を行える実力・体制を早期に確立する必要があると思われる（実際に前任地では再手術等でない限り、術者を含めて2名の外科医で手術を行っていた）。特に、定時手術では慈恵医大より橋本副学長を始めとする派遣医師の、緊急手術では田中先生の御協力を、それぞれ仰がないと満足に手術を行うことができない現状を考慮すると喫緊の課題と思われる。

しかし、昨年は手術件数を増やすことを目標として前述のように緊急例・重症例も積極的に手術を行う方針としたが、自己の外科医としての実力は勿論のこと、当科に関わる病院全体の実力や許容量を越える時期があったことも事実である。この1年で近隣施設である富士宮市立病院・循環器内科から当科への直接紹介症例も増え、開心術症例の更なる増加も見込めると思えるが、現状ではその数を安全に行えるハードが整っていないことを痛感している。医局関連他施設と比較して年間症例数が少ない状況で、現在の当院のハードで症例数の増加と安定した成績を叶えるために、自己の研鑽は当然として具体的にどのように打開していくかが今後数年を通しての課題と思われる。

(文責 田口真吾)

■小児科

1 スタッフ

役職	氏名	役職	氏名
副部長	秋山 直枝	専任医師	増田 早織
副部長	海野 浩寿	専任医師	中村 祐輔（～9月）
医長	池本 智	専任医師	持田 純（10月～）
医員	藤多 慧	専任医師	渡辺 健太（10月～）
専任医師	橋高 恵美（～9月）		

2 令和元年度の診療実績

基幹病院の小児科として、一般小児科診療、小児救急、新生児医療を地域で開業されている先生方、富士市救急医療センターと連携し、24時間体制で小児患者の受け入れを行っている。また、静岡県立こども病院とも連携している。

令和元年度の退院数は全体で868件、内訳として平成26年7月から認可されているNICU（新生児特定集中治療室）189件、呼吸器系206件、感染症86件、その他であり、新生児は21.8%であった。

専門的医療として、小児消化器内視鏡検査は総数27件（上部消化器内視鏡検査10件、大腸内視鏡検査11件、小腸カプセル内視鏡検査6件）であった。食物アレルギーに対する食物経口負荷試験は総数90件、内訳は鶏卵56件、牛乳12件、ピーナッツ4件、エビ4件、そば4件、クルミ3件、小麦2件、その他（カジキマグロ、鮭、桃、豆腐、ゴマ）5件であった。平成30年6月からはスギ・ダニの舌下免疫療法を行っている。

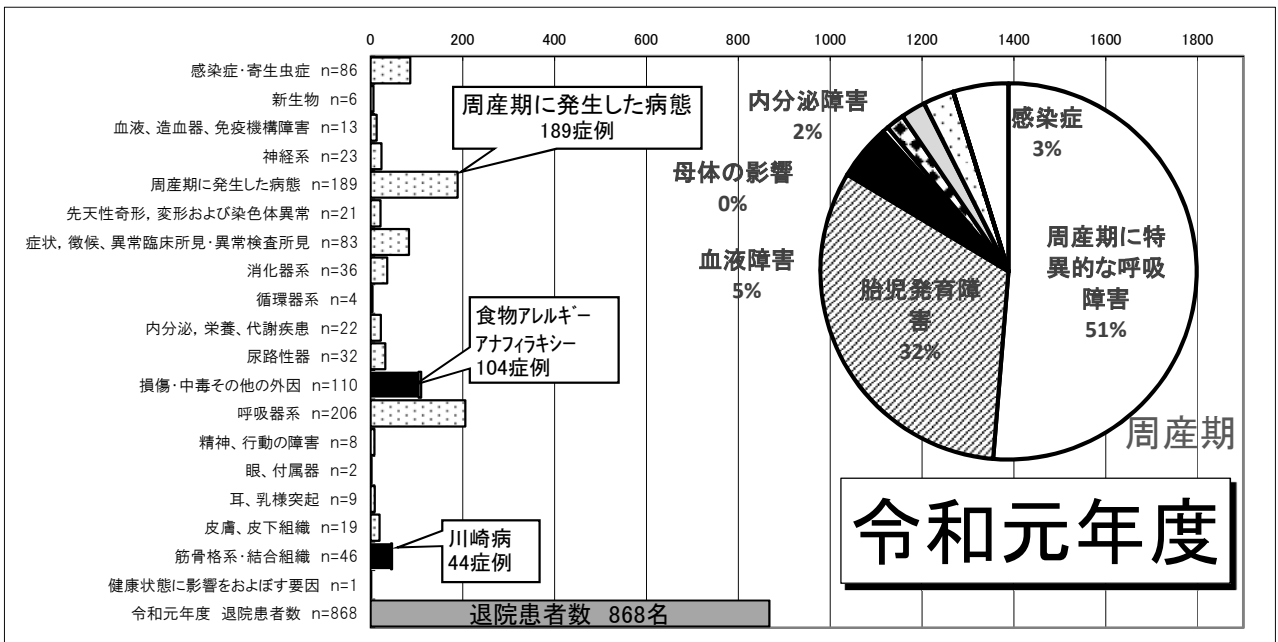
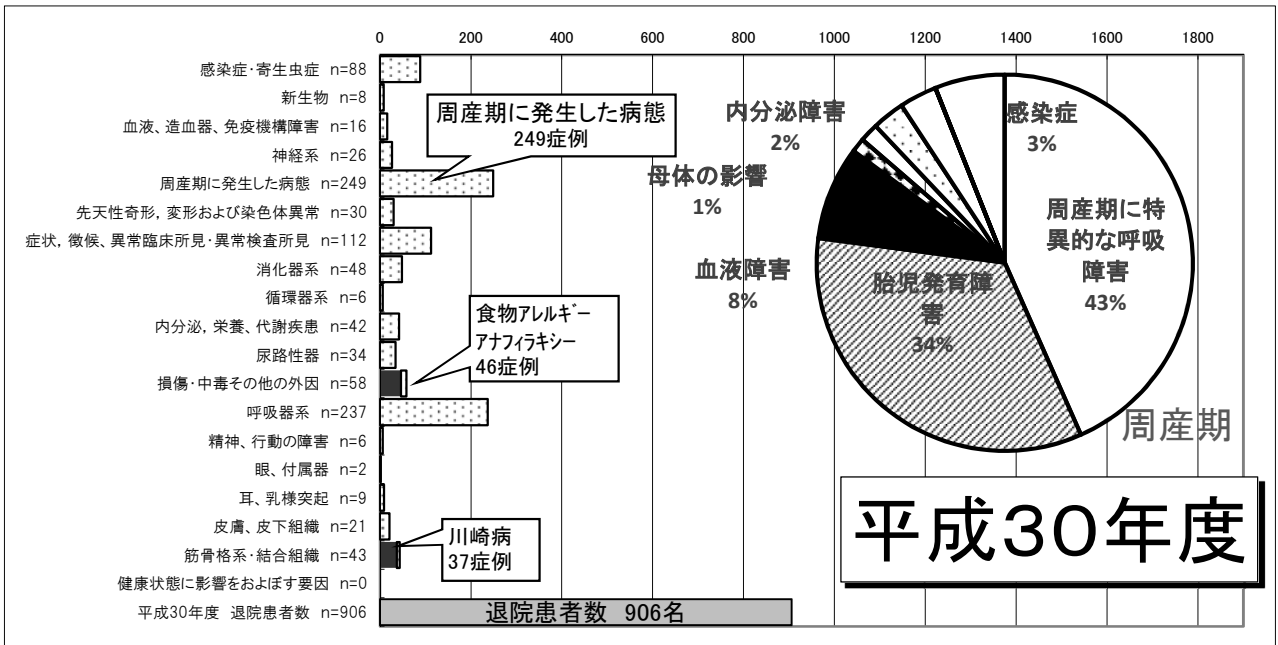
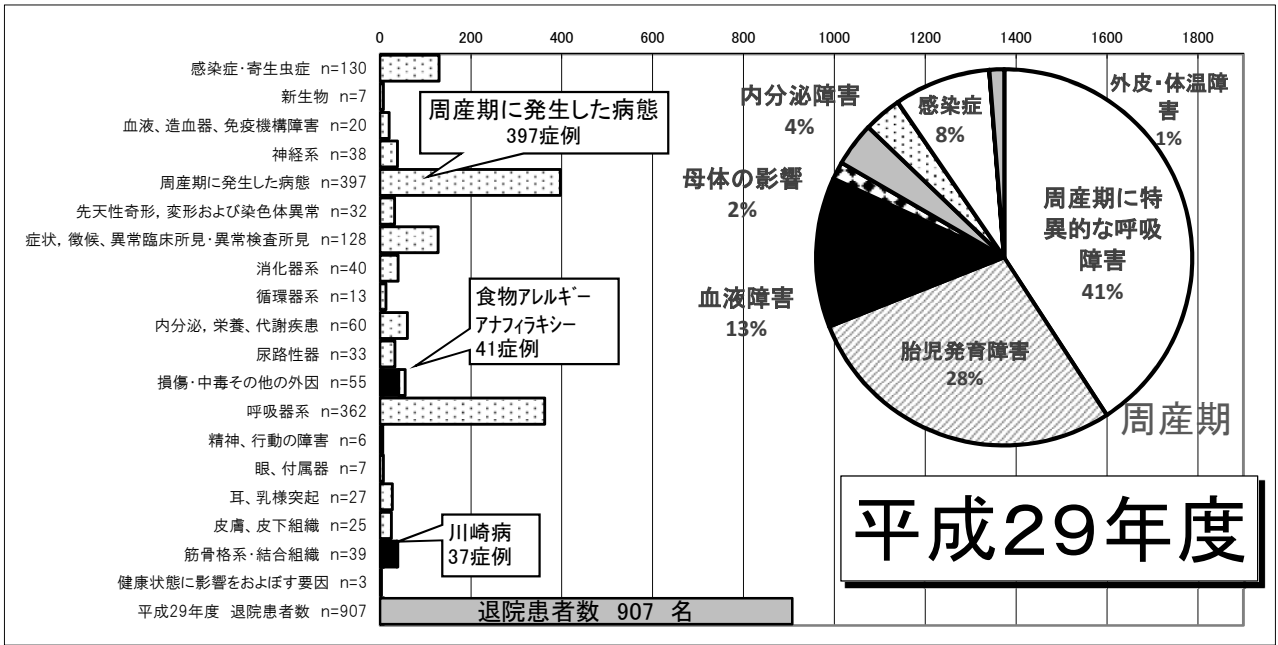
平成28年9月より始まった診療参加型臨床実習として東京慈恵会医科大学5～6年生の受け入れを行っており、4週間毎1名ずつ配属されている。

週1回の重症患者への対応シミュレーション、病棟での勉強会を頻回に行うとともに、学会発表や論文投稿など、医療全体への貢献も積極的に行っている。

3 来年度の課題

地域医療機関、静岡県立こども病院と密に連絡をとり、プライマリ・ケアから専門的医療まで包括的で質の高い小児医療を提供することを引き続き目指していきたい。

（文責 秋山 直枝）



■外科

1 外科スタッフ

役 職	氏 名	役 職	氏 名
院長	柏木 秀幸	部長	梶本 徹也
副部長	鈴木 俊雅	副部長	吉田 清哉
副部長	良元 和久	副部長	道躰 隆行
医長	入村 雄也	医長	高野 裕樹(～12月)
医員	北村 博頭(1月～)	専任医師	吉岡 聡
専任医師	後藤 圭佑(～6月)	専任医師	山田 雄太
専任医師	梶 睦(7月～)		



2018年12月撮影



2019年12月撮影

2 令和元年度の診療実績

食道良性手術（アカラシアや逆流性食道炎など）4件、食道がん手術1件、スリーブ状胃切除術（減量手術）29件、胃・十二指腸良性手術25件、胃がん手術33件、小腸手術（腸閉塞や悪性疾患など）30件、虫垂切除術53件、大腸手術111件、肛門手術（痔疾患など）19件、そけい・腹壁ヘルニア手術133件、胆嚢・胆管結石手術94件、肝臓・胆道がん手術22件、膵がん手術21件、乳がん手術56件、呼吸器手術42件、小児外科手術31件

	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
上部消化管	106	106	92
下部消化管	220	265	221
肝胆膵	160	157	139
ヘルニア	98	112	140
呼吸器	14	26	42
乳腺	55	51	57
小児外科	1	28	31
手術総数(鏡視下手術)	831(303)	914(342)	887(312)

3 来年度の課題

外科の診療領域は、消化器外科、乳腺外科、呼吸器外科、小児外科と幅広い。悪性疾患が多く、手術だけではなく化学療法や放射線治療（radiation therapy & IVR）、緩和医療にも深く関与している。外科だけで完結できる領域はなく、内科、小児科、麻酔科、放射線科、薬剤師、認定看護師（がん化学療法、皮膚排泄ケア、緩和ケア、感染管理、クリティカルケア、手術、各領域の認定看護師が当院在籍）とのより一層の緊密な連携を築いていきたいと考えている。

この原稿を執筆している時点で、COVID19 ウイルス感染に世界中が巻き込まれている。富士市の中核病院として、当院は積極的に感染対策に取り組んでおり、関係者の方々の努力には頭が下がる。大規模災害に匹敵する今回の感染症に対して、医療制度がいかに脆弱であり、医療体制を維持することがどれだけ大切かを改めて認識している。

（文責 梶本徹也）

■整形外科

1 スタッフ

役 職	氏 名	役 職	氏 名
部長	加藤 努	副部長	三橋 真
医長	原田 直毅	医長	船井 充
専任医師	木原 匠 (～7月)	専任医師	山下 紀 (7月～)
専任医師	宮嶋 寛武 (～7月)	専任医師	玉川 明香 (7月～12月)
専任医師	生田 匠 (1月～)		

2 令和元年度の診療実績

静岡県東部地域の二次救急病院として、多くの外傷患者の診療・治療を行っている。近年の交通・労災外傷の減少に伴い、高エネルギー外傷は減少傾向にあるが、高齢者の転倒による骨折は多かった。当院は総合病院であるため合併症を併せ持つ患者も多く、それに対する治療介入に苦慮した。年間手術件数は約 500 件であり、その内、変形性関節症に対する人工関節手術は年間約 60 件占めている。骨切手術や骨バンクを用いた高難度の再置換手術も多く行われていた。

乳児股関節検診については、世の中で股関節脱臼の見逃しが報告されており、令和元年度からは当院で出生した乳児に対し、エコーを用いた検診が行えるよう体制を整えた。

	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
人工関節置換術	63	44	39
大腿骨近位部骨折 (骨接合術・人工骨頭置換術)	224	213	209
その他	248	331	236
合計手術件数	535	588	484

3 来年度の課題

富士市の健康寿命を向上させるためには、高齢者の骨折・寝たきりを予防することが重要である。当院での大腿骨頸部骨折治療患者は 200 件を超え、そのほとんどが合併症を併せ持っている。高齢者の骨折において可及的早期の手術が重要であるが、合併症の存在がネックとなっている。他科との連携をとり、早期手術ができるような体制を整えていきたい。また、併せて近隣病院と連携を取りながら骨粗鬆症への治療介入を行っていきたい。

(文責 加藤 努)

■形成外科

1 スタッフ

役職	氏名	役職	氏名
医長	山田 啓太	専任医師	吉武 貴士

2 令和元年度の診療実績

令和元年度の診療実績は下記のとおりである。（参考：平成29・30・令和元年度併記）

	入院手術			外来手術			合計		
	H29	H30	R元	H29	H30	R元	H29	H30	R元
外傷	128	218	102	132	245	139	260	463	241
先天異常	13	9	7	4	3	5	17	12	12
腫瘍	55	63	69	200	170	211	255	233	280
瘢痕、ケロイド	5	2	2	5	3	5	10	5	7
難治性潰瘍	4	1	15	0	2	13	4	3	28
炎症、変性疾患	14	15	43	73	92	65	87	107	108
計	219	308	238	414	515	438	633	823	676

3. 来年度の課題

- (1) 平成31年4月より、スタッフ1名が減員され2名体制の診療に戻る事となった。
医療安全に最大限注意しつつ、少ない人員でもできる範囲で幅広く対応していけるよう工夫していく。
- (2) 手外科中心の診療体制を継続しつつ、その他の分野の症例も少しずつ増やしていけるよう取り組んでいきたいと考えている。

(文責 赤石 渉)

■脳神経外科

1 スタッフ

役 職	氏 名	役 職	氏 名
部長	諸岡 暁	副部長	野田 靖人
医員	藤田 周佑 (～9月)	専任医師	堀内 一史 (10月～)
専任医師	山本 康平		

2 令和元年度の診療実績

入院疾患の割合および手術数は表のとおり。

(1) 入院疾患別割合(%)

	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
くも膜下出血	4	7	6
脳出血	17	13	16
脳梗塞	16	9	9
頭部外傷	39	38	40
腫瘍	7	6	6
脊椎	2	2	1
血管内治療関連	7	12	9
その他	8	14	13

(2) 手術件数

	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
頭部手術	167	183	178
①開頭手術	68	61	38
②神経内視鏡手術	7	4	4
③脳血管内手術	26	25	32
脊椎手術	15	3	2

- ・ 疾患別入院数割合はほぼ前年度同様。
- ・ 脳血管内治療は増加し、血管内治療専門医は非常勤であるが24時間以内の対応はできている。脳梗塞の血栓溶解治療を引き継ぐ血栓回収治療も行なっている。
- ・ 脳腫瘍は減少して、開頭手術が減少した。

- ・入院期間はD P C II期を意識し、脳卒中地域連携パスによるリハビリテーション転院が順調である。

3 来年度の課題

- ・手術数は引き続き 200 件超を目標とする。
- ・脳梗塞の機能回復のため脳血栓回収を増やす。
- ・血管内治療専門医および脊椎手術専門医の常勤派遣を大学教室へ要請していく。

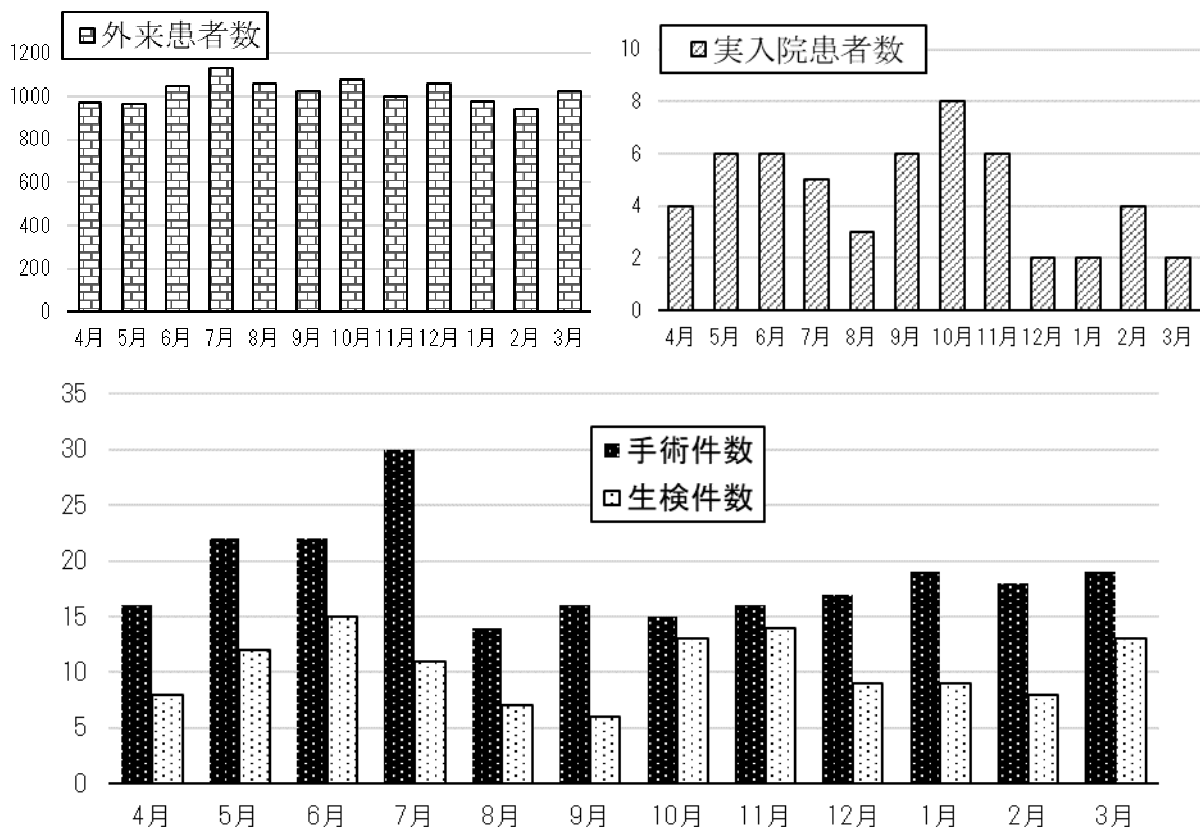
(文責 諸岡 暁)

■皮膚科

1 スタッフ

役職	氏名	役職	氏名
部長	津嶋 友央	医員	森下 ナオミ

2 令和元年度の診療実績



	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
外来患者数 (人)	11,891	11,462	12,268
実入院患者数 (人)	47	62	54
手術数 (件)	219	176	224
皮膚生検数 (件)	154	115	125

3 来年度の課題

入院適応のある症例は、患者の症状にあわせて入院治療をすすめ、より質の高い医療を提供する。

(文責 津嶋 友央)

■泌尿器科

1 スタッフ

役職	氏名	役職	氏名
部長	後藤 博一	副部長	鈴木 英訓
副部長	下村 達也 (～6月)	副部長	村上 雅哉 (7月～)
医員	笹原 太志郎 (～9月)	医員	石川 美夢 (10月～)
医員	宮島 慶一郎 (～6月)	医員	高見澤 重彰 (7月～)

2 令和元年度の診療実績

令和元年度は常勤医5名と非常勤3名で診療を行った。悪性疾患、尿路結石、尿路感染症など泌尿器科領域全般の疾患に対し、初期治療から緩和医療、終末期治療まで一貫した診療を行い、富士宮地区を含む富士医療圏で入院診療・手術が可能な泌尿器科として、中心的存在として診療を行っている。診療は一次、二次だけでなく、場合によって三次診療まで行っている。平成28年度から開始した腹腔鏡手術は今まで開腹手術で行っていた前立腺癌、膀胱癌まで適応を拡大し、令和元年11月からは腹腔鏡下前立腺全摘術、腹腔鏡下膀胱全摘術も導入した。平成30年度に新機種に更新されたESWLに加え、令和2年3月から経尿道的結石破砕術に必要なレーザー破砕装置も導入し、結石の部位、大きさに関係なく患者さんに適した結石治療を行えるようになった。転移性腎癌、尿路上皮癌や去勢抵抗性前立腺癌に対しては、通院化学療法や新規治療薬を積極的に導入し治療を行っている。泌尿器科女性専門外来も、非常勤の女性医師が引き続き担当し、順調に診療が行われた。

主な手術の年次推移

* () 内は腹腔鏡下手術の件数

	平成29年度	平成30年度	令和元年度
経尿道的前立腺切除術	43	45	45
経尿道的膀胱腫瘍切除術	202	241	204
腎・尿管悪性腫瘍手術	34 (31)	36 (36)	41 (37)
膀胱全摘術	10 (0)	10 (0)	9 (3)
前立腺全摘術	10 (0)	15 (0)	13 (8)
経尿道的結石破砕術	0	4	15
体外衝撃波結石破砕術	546	527	528
年間手術件数 (ESWL 除く)	416	489	460

3 来年度の課題

今年度導入した前立腺癌、膀胱癌に対する腹腔鏡手術、レーザー破砕装置による結石治療を平素より紹介いただいている近隣のクリニックにも周知いただき、紹介患者、症例数を増やしていきたい。また、既に保険診療における拡大適応も行われている手術支援ロボットの導入の礎としたい。

(文責 後藤 博一)

■産婦人科

1 スタッフ

役 職	氏 名	役 職	氏 名
副部長	矢田 大輔	医長	小田 彩子
医員	佐藤 あずさ	医員	中野 史織
医員	飯田 瀬里香	医員	井上 結貴
医員	戎野 志織		

2 令和元年度の診療実績

当科は地域周産期母子センターとして、ハイリスク分娩や地域からの母体搬送の受け入れを行っている。分娩件数は減少傾向にあるが、ハイリスク症例や母体搬送に関しては横ばいである。

婦人科疾患では、良性手術における腹腔鏡手術件数が年々、増加している。これは技術向上による適応拡大に起因することが大きいと考える。

悪性腫瘍手術は、近隣に静岡県立がんセンターがあるが、患者様の希望があれば当院で手術を施行している。それに応えるべく、病気だけでなく、患者の背景や社会環境を鑑みた医療を提供できるよう努力している。

生殖医療は近年一定数の件数を維持している。

主な診療実績

	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
分娩件数	554	588	550
母体搬送受入数	63	86	70
帝王切開件数	129	135	112
内視鏡下（腹腔鏡下および子宮鏡下）手術数	220	184	110
良性疾患（開腹及び膺式）手術数	188	230	246
悪性腫瘍手術数	27	23	26
総手術数	564	535	494

生殖補助医療

	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
人工授精件数	92	98	41
体外受精件数	107	98	19
融解胚移植件数	172	143	54

3 来年度の課題

来年度も引き続き地域周産期母子センターとして、ハイリスク症例や母体搬送もしくは急変した妊婦が、安心してお産ができるように周産期チームとして、小児科医師、看護師、その他のスタッフとの連携を今後も大事にしていく。

婦人科手術は骨盤臓器脱に対する腹腔鏡下仙骨脛固定術を新たに取り入れるため、合併症のない安全な医療を提供できるように研鑽を積む。また学会活動に積極的に参加して最新の知見を吸収し、実臨床に還元できるよう邁進する。

(文責 矢田 大輔)

■眼科

1 スタッフ

役 職	氏 名	役 職	氏 名
部長	藤谷 暢子	副部長	渡辺 勝

2 令和元年度の診療実績

外来診療は、眼科医2名、視能訓練士3名、看護師2名、医療補助1名、受付1名で行った。

基本的に、月・火・水・金曜日は2診、木曜日は1診（第4木曜日のみ2診）であった。

午前中は、紹介予約枠を使った紹介初診を最優先とし、9時から予約診察を行っている。予約外や初診も11時までの受付で診察可能である。午後は完全予約検査であり、視野検査、眼位検査、レーザー、蛍光眼底撮影、抗 VEGF 薬硝子体注射、ボツリヌス毒素製剤注射、涙点プラグ・鼻涙管シリコンチューブ挿入・霰粒腫・治療的表層角膜切除等の外来小手術、小児の弱視・斜視外来を行っている。また、ブドウ膜炎に対する自己注射の指導や、点眼が不得意な患者に対する看護師の点眼指導等、きめ細かい対応も行っている。

平成24年から開始したロービジョン外来も継続している。月1回予約制で、補助具を合わせ、日常生活のアドバイスを行っている。iPadによるロービジョンケアも取り入れており、他院からのロービジョン外来のご紹介にも対応している。

また、平成26年から始めたオルソケラトロジーも行っている。まだ処方数は少ないが、病院ウェブサイトを見て、遠方から受診して頂くこともあり、今後も継続していく。

山梨大学眼科から飯島裕幸名誉教授にお越し頂く教授外来も継続している。今後も2ヶ月に1回難症例を診て頂くことで、患者さんのためだけでなく我々の診療技術の向上にもなると考えている。

中央手術室での手術は、月曜午後と火曜午後に行っている。白内障を中心に、緑内障、網膜剥離、翼状片、斜視、眼瞼内反症など行っている。

白内障手術は、片眼2泊3日入院と日帰り手術を選択して頂いている。様々な理由で入院することが難しい患者さんのニーズに応えたもので、徐々に日帰り手術件数が増え、結果的に手術総件数が増加している。認知症や精神発達遅滞等のために全身麻酔で行う症例も受け入れており、3泊4日入院で治療を行っている。

硝子体手術については、月1回、山梨大学から専門医を招き、少数ながら万全の体制で行っている。

中央手術室での眼科手術

	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
白内障手術	253	239	241
緑内障手術	23	25	44
硝子体手術	22	20	16
網膜剥離手術	2	0	1
強角膜縫合術	0	2	2
翼状片手術	1	2	3
斜視手術	4	0	2
眼瞼内反症手術	2	10	5
その他	2	1	6
計	309	299	298*

(* 同時手術の為、重複あり)

	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
抗 VEGF 硝子体注射	200	215	228

3. 来年度の課題

当科の位置付けとしては、他院・他科との連携である。令和元年度は、近隣の開業医の先生を個別訪問し、更なる連携を図った。当科の取り組みをお知らせすることで、御紹介頂くことが増え、良い機会となった。今後も連携強化に努める。懸案であった多焦点眼内レンズの取り扱いを始めたが、令和 2 年度より先進医療から選定療養となった。料金体系等は未定であるが、確定し次第開始したい。令和元年度末から新型コロナウイルス感染症が流行している。診療体制を維持しながら、感染予防に努めることが最も優先される課題と認識している。

(文責 藤谷 暢子)

■耳鼻咽喉科

1. スタッフ

役 職	氏 名	役 職	氏 名
部長	重田 泰史	医員	児玉 浩希
医員	尾田 丈明		

2. 令和元年度の診療実績

耳鼻咽喉科は3人体制で診療をし、耳、鼻、咽喉頭、頸部の診断・治療を幅広く行っている。午前中は一般外来を行い、特別な治療や処置が必要となる患者さんは午後に来ていただき治療、処置を行っている。手術日は火・金の週2日間で、高度な技術を必要とする手術は東京慈恵会医科大学の医師を招聘し行っている。進行癌症例は静岡県立静岡がんセンターと連携している。また当科の特色として嚥下障害患者に対する診断・治療を積極的に行い、院内の絶食患者のより安全な経口摂取の再開を目指している。

	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
嚥下機能評価患者	52	39	34
内視鏡下鼻内副鼻腔手術	110	105	85
鼻中隔矯正術	47	47	35
口蓋扁桃摘出術	65	66	65

3. 来年度の課題

得意分野である内視鏡下鼻内副鼻腔手術を柱として、手術症例数を増やすことができるよう努力したいと考えている。

耳鼻咽喉科での嚥下機能評価患者は減少しているが、ST も含めた嚥下機能評価患者は増加しており、院内全体としての嚥下機能評価患者数は増加している。引き続き ST と連携して嚥下機能評価を行っていきたい。

(文責 重田 泰史)

■放射線科

1 スタッフ

役 職	氏 名		
医長	道本 顕吉		

2 令和元年度の診療実績

引き続き、CT、MRI、RI、超音波に関して可及的迅速に全件読影を行っており、これらの検査件数は概ね右肩上がりの状況が続いているが、画像診断管理加算2（CT/MR/RI の8割以上の読影結果が、常勤専門医により撮影日の翌診療日までに主治医に報告される事を条件に、1件ごとに180点算定される）の算定施設基準を維持することができた。IVRに関しても幅広い処置を施行しており、運動器の慢性疼痛のカテーテル治療の開始、子宮筋腫のカテーテル治療の開始準備など、更なる拡充を目指している。

IVR 部門

	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
合計	190	190	273
Vascular IVR	119	122	149
肝癌の化学塞栓・動注療法（TACE/TAI）	39	31	26
胃静脈瘤の塞栓（BRTO/PTO）	2	3	7
喀血に対する気管支動脈塞栓（BAE）	6	6	17
透析シャントの血管形成術（PTA）	7	15	10
静脈サンプリング（副腎、膵臓、下垂体など）	1	1	5
PICC Line 挿入	26	22	19
関節疼痛に対する IVR	-	4	4
緊急止血術	25	20	31
動脈瘤、血管奇形、その他	13	20	30
Non-vascular IVR	71	68	124
経皮的生検	25	22	35
膿瘍に対する経皮的ドレナージ	30	25	53
胆道系	6	8	3
血管腫に対する硬化療法	6	9	3
その他	4	4	30

読影部門

	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
総読影件数	35,639	35,496	37,568
CT	21,493	21,924	23,221
MRI	5,824	5,683	5,923
US	7,407	7,019	7,459
アイソトープ	915	870	965

放射線治療人数

	平成 28 年度	平成 30 年度	令和元年度
患者数	145	159	162
頭頸部	5	6	11
胸部	61	57	74
腹部	10	5	7
骨盤	29	47	21
骨軟部	41	44	49

3 来年度の課題

- ・他科との連携をさらに密にしていく。
- ・IVR 業務の拡充
- ・読影管理加算 2 の算定施設基準を維持する。
- ・病診連携（高度医療機器利用依頼）にさらに力を入れ、逆紹介率向上に貢献する。

（文責 道本顕吉）

■麻酔科

1 スタッフ

役 職	氏 名	役 職	氏 名
部長	井上 恒佳	副部長	大谷 法理
医長	影山 佳世		

2 令和元年度の診療実績

過去3年間の麻酔科管理手術症例の推移は下表のとおりである。

平成29年度より同じスタッフによる体制での麻酔科管理を行っている。本年度は昨年度に比べて手術件数総数自体が減少したため、麻酔科管理症例数、全身麻酔件数ともに大幅な減少となってしまった。

一方で手術管理科の協力のもと、引き続き手術室運営については積極的に介入した。

本年度は手術室における抜管基準および退室基準を明文化し、各手術室に掲示した。これにより、患者により安全な麻酔および手術を提供できるようになり、またスタッフ間においても安全の基準がわかりやすくなるという効果が得られた。

	平成29年度	平成30年度	令和元年度
麻酔科管理症例数	1,708	1,733	1,556
全身麻酔 (他の麻酔方法の併用を含む)	1,670	1,701	1,520
硬膜外麻酔・脊椎くも膜下麻酔 (どちらか一方・両者併用を含む)	26	26	30
その他	12	6	6

3 来年度の課題

昨今の新型コロナウイルス流行に伴い、手術件数の大幅減は避けられない状況にある。一方で緊急手術などでは、麻酔科医はウイルス陽性あるいは保因者である患者に曝露されるリスクが非常に高い。そのためウイルス流行終息の目途が立つまでは、スタッフが感染しないような安全な手術環境づくりが最優先になるものとする。

また、以前からの課題でもあった麻酔の質の向上については現在改善中である。こちらも引き続き継続していく。

(文責 井上 恒佳)

■病理診断科

1 スタッフ

役 職	氏 名	役 職	氏 名
部長	遠藤 泰彦		

2 令和元年度の診療実績

病理組織診断	5,174 件
（内、術中迅速診断）	149 件
細胞診断	5,023 件
病理解剖	10 件
CPC 開催	年 4 回
各診療科とのカンファレンス	多数

常勤医師 1 名、非常勤医師 1 名、臨床検査技師・細胞検査士 6 名、医師事務作業補助者 1 名を含めた構成で業務を行っており、場合によっては東京慈恵会医科大学との連携のもと診断を行うこともある。過去 3 年の実績をご覧頂くとわかるが診断件数は年々明らかに増加してきており、また免疫染色の件数に関しても明らかな増加が認められる。

※ 過去 3 年間の診断件数

	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
組織診断	5,209	5,024	5,174
（内、術中迅速診断）	(156)	(158)	(149)
細胞診断	4,840	5,154	5,023
病理解剖	9	9	10

3 来年度の課題

病理診断は非常に重要な検査であり、特に腫瘍で陽性・悪性を決める場合には最終診断となる。このことは、治療方針の決定、治療効果の評価、および予後判定に重要な意味を持っている。病理医は、常に患者さんとともに病気と健康について考え、最善の医療が提供できるよう心がけている。

（文責 遠藤 泰彦）

■ 歯科口腔外科

1 スタッフ

役 職	氏 名	役 職	氏 名
部長	勝山 直彦	副部長	井出 正俊
医員	大岩 浩気	医員	東條 恵一

2 令和元年度の診療実績

地域基幹病院の口腔外科として主に難抜歯、外傷、炎症、腫瘍、嚢胞、粘膜疾患、奇形・変形の手術を行っている。当科は、一般開業医では処置困難な症例を扱い、通常の歯科治療は行っておりません。

令和元年度全身麻酔または静脈麻酔の症例は169例で、外来局所麻酔は2,626例でした。

その内訳は、難抜歯が最も多く、ついで嚢胞、外傷の順でした。

手術症例

	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
難抜歯	1,895	1,903	2,242
嚢胞	106	79	123
外傷	21	17	13
その他	399	473	248
計	2,421	2,472	2,626

3 来年度の課題

今後、地域基幹病院の口腔外科として地域医療機関と密な連携をはかり手術症例を増やしたいと考えている。昨年同様に、顎変形症について、県東部の歯科矯正医との連携をとり症例を増やす予定である。

当院は、富士市で唯一の基幹病院であるため富士市民のために質の高い医療を提供できるよう研鑽・努力していきたい。

(文責 勝山 直彦)

■手術管理科

1 スタッフ

役 職	氏 名	役 職	氏 名
部長	良元 和久		

2 令和元年度の診療実績

手術室の安全性や効率性の向上を目指し、手術室全体の運用や診療部の調整、緊急時の対応ができる管理体制を構築した。

- ・手術件数等は手術室運営委員会の「令和元年度の実績」を参照。
- ・特殊カンファレンスを行い、安全な手術運営を行った。

特殊カンファレンス開催件数

平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
9	3	9

3 来年度の課題

- ・他診療部、手術室スタッフと協力し、さらなる手術室の効率で安全な運用を目指す。
- ・手術医療機器の更新等の見直しを行い、適正な機器の選定、管理を行う。
- ・手術枠を有効に使用するためにアンケートを行い、定期的に見直す。

(文責 良元 和久)

■非常勤医師

(平成31年4月1日現在)

所 属	氏 名	所 属	氏 名
糖尿病・内分泌・血液内科	谷口 幹太	糖尿病・内分泌・血液内科	比企 能人
消化器内科	中野 真範	内科（内視鏡）	加藤 正之
内科（内視鏡）	内山 勇二郎	内科（内視鏡）	鳥巢 勇一
内科（膠原病）	伊藤 晴康	腎臓内科	川村 哲也
神経内科	高津 宏樹	精神神経科	三宮 正久
精神神経科	野口 百合	精神神経科	野口 百合
循環器内科	谷川 真一	心臓血管外科	橋本 和弘
心臓血管外科	田中 圭	心臓血管外科	木南 寛造
外科（内視鏡）	宮川 朗	外科（呼吸器）	森川 利昭
外科（小児外科）	芦塚 修一	外科（内視鏡）	増田 勝紀
小児科	松岡 諒	外科（女性外来）	神尾 麻紀子
小児科（小児精神）	服部 浩平	小児科（小児発達）	安田 寛二
脳神経外科	武井 淳	脳神経外科	坂本 広喜
形成外科	平川 正彦	脳神経外科	秋山 雅彦
泌尿器科	平本 有希子	リハビリテーション科	佐々木 信幸
泌尿器科	稲葉 裕之	泌尿器科	阿部 和弘
産婦人科	廣中 由紀	産婦人科	金山 尚裕
放射線科	竹永 晋介	産婦人科	鈴木 康之
放射線科	和田 紘幸	放射線科	大木 一剛
放射線科	成田 賢一	放射線科	松井 洋
放射線科	樋口 陽大	放射線科	榎 啓太朗
放射線科	白石 めぐみ	放射線科	五味 拓
放射線科	青木 真一	放射線科	加納 瑠為
麻酔科	渡邊 薫	放射線科	小宮山 貴史
麻酔科	亀田 慎也	麻酔科	越後 憲之
麻酔科	石川 麻梨絵	麻酔科	八木 俊
麻酔科	織原 広貴	麻酔科	押田 一真
麻酔科	倉田 早織	麻酔科	上村 真央
麻酔科	佐藤 和貴	麻酔科	小池 真純
麻酔科	清水 啓介	麻酔科	佐野 友里
麻酔科	高橋 和成	麻酔科	鈴木 亜沙美
麻酔科	土井 万由子	麻酔科	高橋 真悠子
麻酔科	中村 紗英	麻酔科	中沢 真優子
麻酔科	宮崎 千佳	麻酔科	八木 洗輔

麻醉科	吉村 三恵	病理科	千葉 諭
歯科口腔外科	阿部 恵一	歯科口腔外科	岡山 浩美
歯科口腔外科	森永 桂輔	歯科口腔外科	岡村 尚
歯科口腔外科	砂田 勝久	歯科口腔外科	小林 清佳
歯科口腔外科	猪股 徹	歯科口腔外科	義隆 伸之
歯科口腔外科	吉田 和正	歯科口腔外科	武田 宗矩

■臨床研修医

氏 名	採 用 期 間
塩田 悠乃	平成 30 年 4 月 1 日～令和 2 年 3 月 31 日
白川 毅	平成 30 年 4 月 1 日～令和 2 年 3 月 31 日
萩原 亘	平成 30 年 4 月 1 日～令和 2 年 3 月 31 日
山崎 慎太郎	平成 30 年 4 月 1 日～令和 2 年 3 月 31 日
齋藤 寛大	平成 31 年 4 月 1 日～令和 3 年 3 月 31 日
佐藤 匠	平成 31 年 4 月 1 日～令和 3 年 3 月 31 日
増田 有亮	平成 31 年 4 月 1 日～令和 3 年 3 月 31 日
町野 孝行	令和元年 7 月 1 日～令和 3 年 3 月 31 日
森本 宇	平成 31 年 4 月 1 日～令和 3 年 3 月 31 日
劉 文翰	平成 31 年 4 月 1 日～令和 3 年 3 月 31 日

■臨床検査科

1 スタッフ

役 職	氏 名	役 職	氏 名
嘱託診療参事	千葉 博胤	嘱託診療参事	三川 秀文
技師長	石川 隆之	副技師長	鈴木 雅人
副技師長	鈴木 英昭	副技師長	渡邊 由喜子
参事補兼主任	岩崎 佐知子	参事補兼主任	小野 美代子
参事補兼主任	長峰 誠一郎	主任	渡邊 広明
主任	佐野 僚子	主査	渡邊 修
主査	遠藤 聡	主査	野田 文子
主査	石井 孝良	主査	山本 純子
主査	大野 真一	上席技師	清 亜矢
上席技師	手老 真弓	上席技師	阿部 愛
上席技師	尾形 裕以	技師	栗原 有紀子
技師	内野 有子	技師	竹下 翔太
技師	池田 琢	技師	後藤 理紗
技師	外山 卓矢	技師	柏木 里沙子
技師	大野 成美	技師	森田 合莉
技師	青木 結	臨時職員	加藤 加代子
臨時職員	加藤 才子	臨時職員	後藤 隆広
臨時職員	宇佐美 由紀子	臨時職員	左原 泰子
臨時職員	中山 智美	臨時職員	後藤 敦也
医療補助員	望月 紅野	BML 事務員	原 久美

2 令和元年度の業務実績

	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
生化学検査	2,099,585	2,093,816	2,081,983
血液検査	326,978	318,934	318,619
一般検査	83,509	83,449	88,520
輸血検査	29,282	32,506	34,184
生理検査	34,709	33,407	32,441
病理検査	10,938	11,314	11,065
細菌検査	40,396	41,667	40,992
採血患者数	68,528	68,464	67,317
剖検数	15	9	10

- ・常勤医師配属により検体検査管理加算施設基準Ⅳ（500点）が算定可能となった。
- ・病理検査室で適切な作業環境を構築するため局所排気装置などの設備改修を行った。
ホルマリン作業環境測定は「第1管理区分」となり管理濃度は基準範囲となった。
- ・日本医師会、静岡県医師会、日本臨床検査技師会主催の外部精度管理調査に参加した。
基準範囲を満たし適正な管理体制であることが評価された。
- ・血中薬物濃度検査をルミパルス G2000（CLEIA法）に変更し測定を開始した。
- ・血中アンモニア検査の測定機をドライケム NX10Nに更新し測定を開始した。
- ・バーチャルスライド作成装置をLeica APERIO LU1に更新し、慈恵医科大学付属病院と病理遠隔組織診断の実施に向けシステムを構築した。
- ・臨床検査システムで採血管の取り違いを音声認識にて確認するため、追加検査依頼ラベル認証プログラムを導入した。

<各種認定等資格取得者状況>

名称	人数	名称	人数	名称	人数
細胞検査士	6名	認定輸血検査技師	1名	認定血液検査技師	4名
認定一般検査技師	1名	認定超音波検査士	5名	生殖補助医療胚培養士	2名
体外受精コーディネーター	1名	日本糖尿病療養指導士	5名	心臓リハビリテーション指導士	1名
緊急臨床検査士	4名	健康食品管理士	1名	未病専門指導師	1名
認定心電検査技師	1名	栄養サポートチーム療法士	1名	認定病理検査技師	2名

* 令和元年度新たに認定超音波検査士1名、糖尿病療養指導士1名が取得した。

3 来年度の課題

- ・臨床や他部門からの様々な要望に応えるため、認定資格取得に向けて挑戦できるような職場環境作りを心がけ人材育成や業務の見直しを行っていく。
- ・診療部、看護部、事務部、診療技術部との密な連携を図り、様々な意見、課題に応えながらチーム医療に貢献していく。
- ・迅速で正確な検査結果の報告が行えるよう、精度管理の向上とシステム・分析装置の整備に努め、精度保証認定施設維持と信頼される検査データの提供に努める。
- ・新型コロナウイルスを迅速に診断するため院内検査体制を整備し早急に整える。

(文責 石川 隆之)

■中央放射線科

1. スタッフ

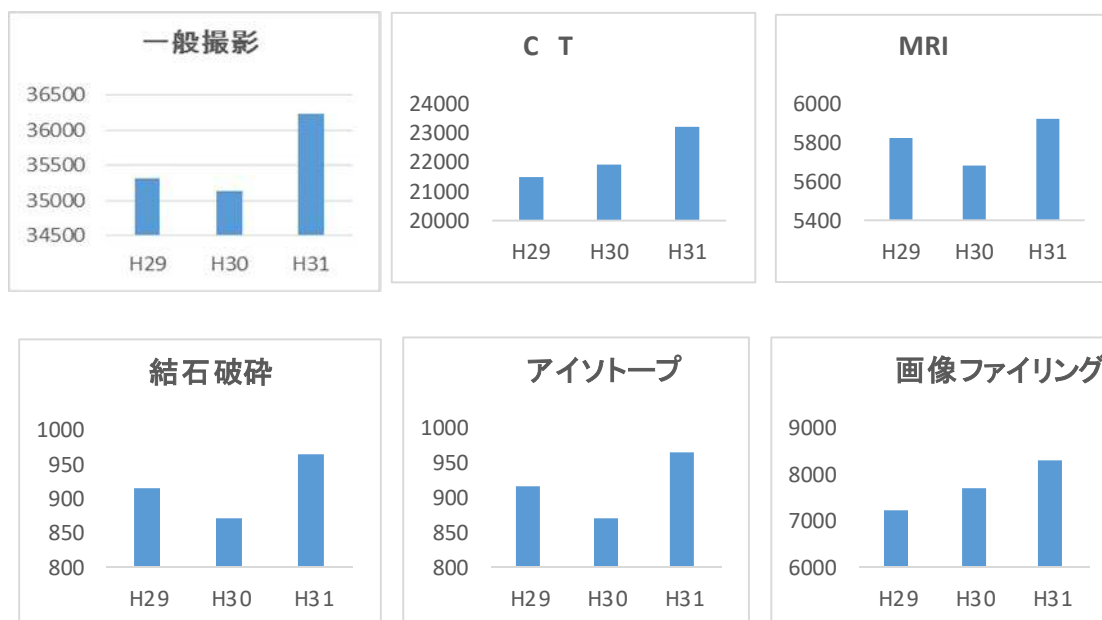
役職	氏名	役職	氏名
技師長	高木 省一	副技師長	清水 則雄
副技師長	遠藤 佳秀	副技師長	杉山 伸一
参事補兼主任	遠藤 一弘	参事補兼主任	菅原 和仁
参事補兼主任	鍋島 雄和	主任	鈴木 和訓
主任	稲垣 伸一	主査	酒井 理香
主査	井出 敦之	主査	岡田 和教
主査	澤口 信孝	主査	大森 知枝
主査	猪股 崇亨	主査	鈴木 浩之
主査	秋田 真弓	上席診療放射線技師	太田原 絢子
上席診療放射線技師	神田 直樹	上席診療放射線技師	岡根谷 侑
診療放射線技師	増田 裕司	診療放射線技師	池谷 桃子
診療放射線技師	三日市 憲治	診療放射線技師	塩崎 博人
診療放射線技師（臨時）	大野 純希	専門員（医療機器管理室室長）	井出 宣孝
医療事務員	中村 明日香	医療事務員	高橋 純子

2. 令和元年度の業務実績

（単位：人）

	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
一般撮影	35,316	35,130	36,236
乳房撮影	455	418	375
ポータブル撮影	11,854	12,567	11,023
心臓カテーテル検査	1,192	1,104	1,153
その他血管造影	184	188	221
C T 撮影	21,493	21,924	23,221
MR I 検査	5,824	5,683	5,923
アイソトープ	915	870	965
骨塩定量	676	717	731
TV 撮影	1,417	1,586	1,454
結石破砕	549	527	626
放射線治療	3,549	3,573	3,158
口腔外科撮影	2,589	2,854	2,877
超音波検査	7,407	7,019	7,459

画像ファイリング	7,235	7,678	8,298
妊婦検診超音波検査	1,978	1,813	1,095
病診連携	1,904	1,871	1,905



- ・ 結石破砕は新装置となり、著明に増加している。アイソトープ、超音波検査では前年度は落ち込んだが、回復を示している。他にも一般撮影、CT 検査、血管造影、画像ファイリングなどが増加している。
- ・ 乳房撮影、妊婦健診超音波検査、放射線治療は減少傾向、
- ・ 心臓カテーテル検査、MRI 検査、病診連携は若干の増減を認めるもほぼ横ばい傾向である。

3 来年度の課題

各診療科との協力の下、高額医療機器の効率的な運用がなされるよう内外に働きかける。また計画的な機器の更新が実現するよう、関係各位と情報を共有する。また技師の育成、及び全体的なレベルアップを図り、将来を見据えた体制を整える。

令和2年度 中央放射線科目標

「高めた知識と技術で信頼の医療を提供」

診療放射線技師として自己研鑽に努めることは元より、医療機器の管理、感染制御、接遇などにも積極的に関わり、安心、安全な医療が遂行できるよう中央放射線科一丸となって邁進する所存である。

(文責 遠藤 佳秀)

■臨床工学科

1 スタッフ

役 職	氏 名	役 職	氏 名
参事補兼主任	池谷 幸一	主査	佐野 達哉
主査	勝間田 賢	主査	諏訪部 新
上席臨床工学技士	杉山 弘一	上席臨床工学技士	平柳 圭佑
臨床工学技士	佐野 汐里	臨床工学技士	山口 智也

2 令和元年度の診療業務実績

	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
手術室臨床業務（定時）	52	45	45
手術室臨床業務（緊急）	8	6	14
手術室保守点検業務	325	306	233
心カテ業務（CAG、PCI、PTA 等）	1108	967	1058
心カテーテル アブレーション	0	28	53
ペースメーカー関連業務	777	717	753
ME 機器室業務（人工呼吸器等）	1006	852	942
ME 機器室業務（輸液シリンジポンプ）	5647	5161	5009
血液浄化業務（CHDF、PMX、PE 等）	63	79	105
計	9186	8361	8199

ME 機器 教育研修実績

	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
中央管理 ME 機器勉強会	34	46	78
手術室 ME 機器勉強会	2	4	10
計	36	50	88

- ・ 病院機能評価結果報告を踏まえ、輸液ポンプ、シリンジポンプ、人工呼吸器の初動チェックを適切に行えるように写真入りのマニュアルを病棟に配備した。
- ・ 中央管理 ME 機器貸出しに管理ソフト導入し、職員の取扱講習を随時行った。現在、運用状況の適切な把握が可能になった。
- ・ 外来および病棟毎に担当者を決め、定置配置されている輸液・シリンジポンプ等の管理体制強化を図った。
- ・ 教育研修実績として中央管理 ME 機器勉強会を年 78 回行った。

<各種認定資格取得者状況>

名称	人数	名称	人数
透析技術認定士	3	体外循環技術認定士	2
呼吸療法認定士	4	心血管インターベンション技士	1
日本 DMAT	1		

3 来年度の課題

本年度は、心臓カテーテルアブレーション業務が通年に渡り実施され、今後も治療件数の増加が見込まれる。臨床業務では、心腔内電位を測定・マッピングし、不整脈の診断をサポートする高度な知識が求められることから、スタッフの育成にも力を入れていきたい。

新たな事業として「ペースメーカーのリモート診断」を循環器科・医事課と連携し立ち上げ、ペースメーカー患者の遠隔モニタリングを行い、安心安全な医療に繋げていきたい。

当科の認定資格状況は、呼吸療法認定士、透析技術認定者、体外循環技術認定士、心血管インターベンション技師の認定取得者が在職しているが、次年度は、呼吸療法認定士を全てのスタッフが取得することを目標としたい。

医療機器管理では、「人工心肺装置および補助循環装置」「人工呼吸器」「血液浄化装置」「除細動装置」「閉鎖式保育器」について医療機器管理業務のスペシャリストとして各部門との勉強会、実地講習会等を通じ、当科の目標である「安心安全な医療技術の提供」を実践していきたい。

(文責 池谷 幸一)

■リハビリテーション科

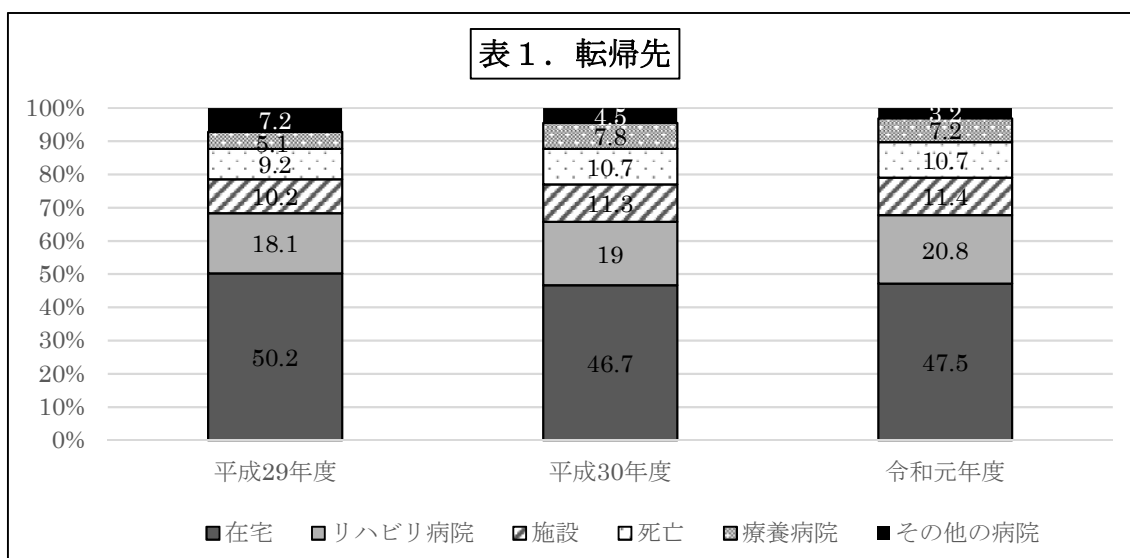
1. スタッフ

役職	氏名	役職	氏名
参事補兼主任（作業）	中村 公美	主任(理学)	深澤 史朗
主査(理学)	和泉 裕美子	主査(作業)	竹川 圭亮
主査（言語）	幾嶋 邦人	上席言語聴覚士	石井 玲奈
上席理学療法士	小田 純市	上席言語聴覚士	佐野 弘美
上席理学療法士	山田 将史	上席理学療法士	鈴木 智乃
上席理学療法士	高橋 良太	上席作業療法士	渡邊 亜希子
上席作業療法士	大原 弘樹	上席作業療法士	中嶋 信夫
理学療法士	若月 優	理学療法士	永嶋 泰玄
理学療法士	梅原 健人	理学療法士	石川 大喜
作業療法士	杉山 かなた	作業療法士	岡本 まなみ
言語聴覚士	宮川 真理子	医療補助員	鈴木 千智世

2. 令和元年度の業務実績

- ・入院・外来患者に対するリハビリ実施単位数は本年報の別ページ【リハビリテーション実施状況】を参照。
- ・令和元年度のリハビリ依頼件数は2352件（入院2173件・外来179件）で、産・育休取得に伴う人員不足により言語療法部門の業務を縮小したために、平成30年度より96件減少した。
- ・リハビリ依頼の約9割を入院患者が占め、疾患別の割合は廃用症候群38.1%、運動器疾患31.8%、脳血管疾患16.8%、呼吸器疾患9.2%、10月より算定開始となった心大血管4.0%で、言語療法部門の業務縮小の影響もあり、平成30年度と比較して廃用症候群の割合は大幅に減少した。
- ・退院先の割合は平成29年度からの3か年でほぼ同じで、在宅・リハビリ病院転院となる患者が全体の7割弱となっている。（表1. 転帰先）
- ・リハビリ依頼からリハビリ開始までは1.74日（平成30年度0.8日）で、リハビリ実施計画書の運用変更の影響で昨年度よりも延長した。
- ・平成30年度よりリハビリの対象患者の見直しを行った影響により「DPC対象患者のリハビリ介入率は入院患者全体の18.5%（平成30年度20.4%）と減少した。
- ・リハビリ開始前後のFIM改善値は平均16.3点（平成30年度20.7点）だった。
- ・4ABを除く全病棟の病棟カンファレンス（週に1回以上）に参加した。
- ・ICU入室患者においては、毎朝の多職種カンファレンスにリハビリスタッフも参加した。
- ・褥瘡・NST（栄養・摂食嚥下口腔ケア）・呼吸器・緩和ケアの回診に参加した。

- ・適宜、患者・家族・ケアマネージャー等とのカンファレンス（リハビリ場面の見学も含め）を行った。（令和元年度：133回）
- ・スタッフ間の治療技術・知識共有を図るためのリハビリテーション科勉強会を月に1回開催し、その他にも研修報告会等を開催した。
- ・看護学校の講師、公害予防事業の講師、市民向けの出前講座5回（骨折と転ばぬ為の身体づくり：3回、認知症予防：2回）を行った。
- ・院内では、病棟・他部門に対して、「ROM」「ポジショニング」「病棟で行えるリハビリ」をテーマに講義を行った。



3. 来年度の課題

- ・「適応に応じた適切なリハビリを提供できる」ことを目標に「リハビリ対象患者の適応基準の見直し」を定めリハビリ介入調整を進めているが、まだ十分な介入ができていないと見えなため、来年度も引き続き進めていきたい。
- ・令和元年度よりリハビリ回診から多職種カンファレンスへ移行し、多職種での情報の交換・共有を進めているが、まだ十分とは言えないために、引き続き進めていきたい。
- ・令和2年度のリハビリ科目標を「患者さまのニーズに沿った安全で安心できるリハビリを提供します！」とし、具体的な目標として「リハビリ依頼（受付日）からリハビリ開始までの日数：1日未満」「(廃用症候群以外の)入院からリハビリ開始までの日数：5日未満」「リハビリ介入時におけるKYT(危険予知トレーニング)：事例発生時」と定めた。
- ・将来的な休日（週休日）リハビリの実施に向け、具体的な方策・運用の検討を行っていく。
- ・各回診への参加・学術研究・勉強会・出前講座等の講師は今までどおりに行っていく。

（文責 中村 公美）

■栄養科

1. スタッフ

役 職	氏 名	役 職	氏 名
主任（管理栄養士）	小俣 朋子	上席栄養士	古郡 朝子
栄養士	田中 ゆりの	栄養士	菊地 実奈子
栄養士	金指 麻衣		

2. 令和元年度の業務実績

(1) 給食管理業務

- ・献立作成・発注・検収・材料仕込み・調理・盛り付け・配膳・下膳・食器洗浄の一連の給食管理業務は、平成10年より全面委託となっている。
- ・箸・スプーン及びマグカップの配膳に対し、返却数・破損状況の把握として、毎月第2土曜日の昼食後に数量確認、定数管理を行い不足分は補充購入とした。
- ・献立会議を毎週火曜日に委託側スタッフと共に開催し、検食時の所見を考慮した改善策を協議。また嗜好調査を年4回、一般食・常食喫食者を対象に実施。調査結果を踏まえて改善策を講じ献立には季節感や年間20回程度の行事食も取り入れ、よりよい食事提供ができるよう努めた。
- ・産科食は朝・昼・夕の3食、その他一部の食種（一般食・常食・軟飯食・全粥食・高血圧食・塩分6g制限食・学童食・学食）については朝・夕の2食を選択メニューで対応し、選択メニュー加算（1食17円追加）を実施した。
- ・小児アレルギー負荷試験の対応として、卵・乳・小麦に対する食物負荷試験食の提供を行うことにより、小児アレルギー食の個別栄養指導件数も増加している。
- ・産後ケア事業の対応として、入院実績ではないが常食の提供を行い対応している。

(2) 栄養管理業務

- ・全入院患者の栄養管理状況の把握として、栄養管理計画書の作成が必須となっているため、栄養管理計画書を毎日作成し、年間作成患者数は25,822件となった。
- ・栄養サポートチーム加算の算定は10年が経過しており、NST専任職員は管理栄養士が担当している。また、NST回診、嚥下・口腔ケア回診、褥瘡回診にも参加（回診実績は別紙参照）し、チーム医療の活動を通して多職種との連携を強め、より患者個々に応じた食事内容、栄養計画の作成、栄養評価が可能となった。
- ・NST活動を通じて他職種のスタッフとの連携が円滑に行われ、他部門との関わりとしての講師依頼数も増加となった。
- ・講師依頼は、緩和ケアや褥瘡対策担当委員会からの依頼により院内勉強会で講師を務め、外部からは山梨県民間病院の事業や職業講和なども担当した。
- ・集団栄養指導は、腎臓病教室（腎臓病と食事）は年2回実施予定であったが今年度は3月のみ実施できなかった。

・個別栄養指導の業務実績は以下のとおりである。

表) 個別栄養指導件数の推移と指導内容の内訳

	平成29年度	平成30年度	令和元年度
個別栄養指導件数	747	819	904
栄養指導内容 内訳 (件数)			
1	糖尿病及び合併症 (218)	糖尿病及び合併症 (203)	糖尿病及び合併症 (312)
2	CKD及び透析 (151)	CKD及び透析 (133)	CKD及び透析(131)
3	妊娠糖尿病 (68)	心臓・高血圧 (107)	心臓・高血圧 (97)
4	高度肥満症及び 肥満症 (58)	妊娠糖尿病 (82)	妊娠糖尿病 (56)
5	嚥下食 (38)	消化管切除術後食 (65)	消化管切除術後食 (45)

*糖尿病及び合併症にはI型糖尿病・糖尿病性腎症も含む。

・次に高度肥満症及び肥満症・嚥下食・小児アレルギー食・脂質異常症食・胆のう炎食と件数が続き、例年と比較すると、がん・低栄養に対する栄養指導件数も増加した。

(3) 実習生の受け入れ及び講師依頼

- ・栄養教諭実習より 1 名、日本短期大学より 2 名、岐阜女子大学より 2 名
中部大学より 1 名、常葉大学より 1 名の実習受け入れを実施。
- ・市立看護専門学校 1 年生の栄養学（調理実習も含）の講師を担当。

3. 来年度の課題

- (1) NST を通じて他部門との連携を強化し、病棟訪問も視野に入れ患者個々に応じた栄養管理の実践に努める。
- (2) 今後も経腸栄養剤や栄養補助食品等の見直しや検討を行い栄養管理に努めていく。
- (3) 栄養管理業務を実施する上で医療に関わる一員として、学会やセミナーに参加し認定資格の取得・保持することでより専門性を高めていくとともに、人材育成としても “認定専門資格(*)の取得” を目指す。

*認定専門資格：

NST 専門療法士・TNT-D 認定管理栄養士・日本糖尿病療養指導士 (CDEJ)
病態栄養認定管理栄養士・がん病態栄養専門管理栄養士・腎臓病療養指導士・高血
圧・循環器病予防療養指導士・日本摂食嚥下リハビリテーション学会認定士 など

(文責 小俣 朋子)

■医療技術科

1 スタッフ

役 職	氏 名	役 職	氏 名
主任（視能訓練士）	平岩 弘子	主査（歯科衛生士）	北澤 美幸
主査（歯科衛生士）	長橋 あゆみ	上席視能訓練士	佐々木 麻理子
歯科衛生士	片瀬 未希	視能訓練士	岡野 夏菜
歯科衛生士	山口 千裕	歯科衛生士	矢部 晴菜
歯科衛生士（R）	深瀬 冴香 （～6月）	歯科衛生士（R）	加藤 恵美子 （7月～）

（R）は臨時職員

2 令和元年度の業務実績

（1）視能訓練士

- ・視機能検査（表1.参照）
- ・視能矯正（表2.参照）
- ・ロービジョンケア（表3.参照）
- ・健診業務（脳ドック 健康診断）（表4.参照）
- ・月、火曜日の午後、手術室にて眼科手術介助を行っている

表1

（件数）

	平成29年度	平成30年度	令和元年度
矯正視力検査・眼鏡処方	8621	8357	8303
角膜曲率半径測定・形状解析	1576	1455	1515
角膜内皮細胞顕微鏡検査	742	747	758
（静的・動的）量的視野検査	1224	1272	1311
両眼視機能検査	179	142	302
眼底検査（三次元解析・画像撮 影・造影検査）	2854	2917	2921
超音波検査（Aモード・断層）	199	216	197
中心フリッカー	146	124	140
色覚検査（定量式・パネルD-15）	4	12	22
電気生理検査	3	3	4
オルソケラトロジー	5人	6人	6人

表 2 (件数)

	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
理学 斜視・弱視視能訓練	55	105	95

表 3 (人数)

	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
ロービジョン外来	3	2	1

表 4 (人数)

	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
脳ドックにおける眼底撮影	46	40	32
健康診断	32	29	1

(2) 歯科衛生士

① 歯科口腔外科における外来業務

- ・ 外来診察のアシスタント
- ・ 外来外科手術の介助、準備、片付け、
- ・ 障害者・有病者に対する外来歯科診療補助（全身麻酔下の診療補助も含む）
- ・ 全身麻酔下における外科処置のアシスト
- ・ 麻酔科診察時におけるアシスト、患者説明、検査データ確認

② 口腔ケア・周術期口腔ケア

	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
口腔ケア依頼件数	422	500	176
周術期口腔ケア依頼件数	219	273	57
合 計	641	773	223

③ その他

- ・ 院内研修会の講師、富士市立看護専門学校講師
- ・ 日本歯科衛生士会、認定歯科衛生士研修会への参加
- ・ 栄養サポートチームへの参加

* 認定専門資格

認定視能訓練士

視能訓練士実習施設指導者

在宅療養指導、口腔機能管理、医科歯科連携 口腔機能管理

3 来年度の課題

(1) 視能訓練士

- ・新規に導入した検査機器を主に検査技術のスキル向上と育成、並びに検査対象の拡大と増員。
- ・知識と技術を向上させ認定視能訓練士の維持と取得、またそのための環境作りや人材育成を目指したい。

(2) 歯科衛生士

- ・地域医療との連携（歯科衛生士連絡表の活用）
- ・委員会への参加、勉強会、出前講座、看護学校の講師を継続して行っていく
- ・委員会や口腔ケアを通じチーム医療に貢献する。
- ・口腔ケアの知識と技術の向上に努める。

(文責 平岩 弘子・北澤 美幸)

■薬剤科

1 スタッフ

役 職	氏 名	役 職	氏 名
薬剤科長	加藤 寛史	副薬剤科長	渡辺 浩臣
参事補兼主任	大滝 哲也	主任	三澤 延司
主任	望月 保子	主任	川口 敬
主任	佐藤 実香	主査	木元 慎一郎
主査	阿部 一仁	主査	柴田 貴子
主査	岩本 一徳	主査	松田 佑平
主査	飛澤 香奈	上席薬剤師	後藤 和美
上席薬剤師	小林 正典	上席薬剤師	池田 嘉隆
上席薬剤師	小坂 裕介	上席薬剤師	木村 佳弘
上席薬剤師	遠藤 大介	薬剤師	鈴木 岳瑠
薬剤師	藤井 文音	薬剤師	高橋 杏奈
薬剤師	本多 大樹	医療補助員	大箸 悦子
医療補助員	大箸 悦子	医療補助員	伊東 江里
医療補助員	望月 比呂子	医療補助員	田中 佳弥

2 令和元年度の業務実績

	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
薬剤管理指導料 1 380 点	3,604	5,949	6,322
薬剤管理指導料 2 325 点	6,713	8,216	8,033
退院時薬剤情報管理指導料 90 点	1,359	2,793	2,732
無菌製剤処理料 1-イ 180 点	2,351	2,125	1,768
無菌製剤処理料 1-ロ 45 点			824
無菌製剤処理料 2 40 点		499	901
特定薬剤治療管理料 2 100 点		173	287
持参薬鑑別	7,674	7,719	8,370
持参薬再調剤	7,126	8,227	9,677
TDM 解析	433	546	546
院内製剤 クラスⅠ	37	47	33
クラスⅡ	1,162	584	240
クラスⅢ	47	58	408
院外処方せん疑義紹介	2,760	2,809	2,814
注射薬個別払出し	300,800	319,982	314,329

- ・新規治験を2件実施した。
- ・富士市と富士市立中央病院、富士市医師会、富士市薬剤師会の連携強化事業として、薬剤師によるCKDシール貼付業務を実施した。

3 資格取得一覧

認定団体	名 称	人数
日本病院薬剤師会	感染制御認定薬剤師	1
	病院薬学認定薬剤師	4
日本薬剤師研修センター	認定実務実習指導薬剤師	7
	小児薬物治療認定薬剤師	1
日本静脈経腸栄養学会	栄養サポートチーム専門療法士	1
日本糖尿病療養指導士認定機構	日本糖尿病療養指導士	1
日本腎臓病協会	腎臓病療養指導士	3

3 来年度の課題

薬剤管理指導業務の推進に取り組む。

- ・薬剤管理指導料の算定件数の確保
- ・病棟間格差の是正方法の検討（標準化・日報）

医薬品在庫管理の適正化に取り組む。

- ・医薬品在庫額の削減を図る
- ・デッドストックの有効期限切れによる廃棄の削減
- ・注射薬の適正な管理を検討する

薬剤師の質的向上を目指し、さらなる自己研鑽に取り組む。

- ・各種専門・認定薬剤師資格の獲得
- ・自己研鑽推進に向けた学会、研修会等の参加の検討

（文責 加藤 寛史）

■看護部長室

1. スタッフ

役 職	氏 名	役 職	氏 名
副院長兼看護部長 (日本看護協会認定看護管理者)	伊藤すみ子	副看護部長 (総務担当)	勝又千壽子
		副看護部長 (教育担当)	大石悦子
		看護補助者	白井美登里

2. 所属の特色

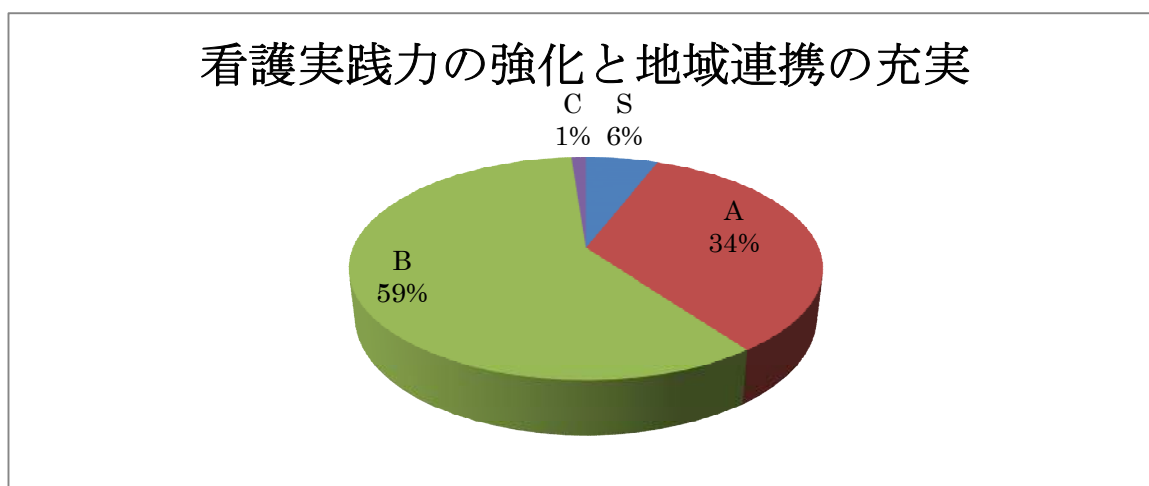
看護部長室には、副院長兼看護部長と2名の副看護部長、事務を担当している看護補助者の計4名が在籍している。スムーズな看護部組織運営のため、副看護部長は総務担当と教育担当に業務を分担している。看護部長室は必要な情報を的確かつ迅速に看護長へ伝達するとともに、看護長からの報告も徹底され問題解決に向けた対応をしている。

3. 令和元年度の目標及び評価

目標「看護実践力の強化と地域連携の充実」

<達成度評価>

- S：目標を大きく上回った
- A：目標を期待以上に上回った
- B：目標を達成した標準的な成果
- C：明らかに下回った



行動目標

- 1) 専門知識・技術に基づいた責任ある看護を実践する
 - ・病棟勉強会 11回 (目標値 4回) 開催できた
 - ・院内外研修に 1人平均 6.1回 (目標値 4回) 参加できた

- ・教育委員会主催の勉強会 7 回（目標値 3 回）、事例検討会 10 例（目標値 5 例）実施できた
 - ・院内外の研修に平均 8 回（目標値 7 回）参加できた
 - ・勉強会 11 回（目標値 10 回）、伝達講習会 44 回（目標値 12 回）実施できた
 - ・Dr カンファレンスを年間 27 例実施できた
 - ・術後 2 病日以内の離床率 93.7%（目標値 90%）と達成できた
 - ・患者カンファレンスを月平均 25 件（目標値 20 件）実施できた
 - ・小児急変時の対応シミュレーションを 11 回実施し、JPTEC の研修を 14 名参加した
 - ・検査前のタイムアウトを 100%（目標値 100%）達成できた
- 2) 高い倫理観の育成
- ・身体拘束患者一人当たりの日数の減少（12.5 日から 10.1 日）が図れた
 - ・病棟デイケア 29 回開催し、身体拘束の減少や認知症症状の悪化防止に繋がった
 - ・医師とともに倫理カンファレンスを 3 回開いた
 - ・倫理カンファレンス 30 例実施した
 - ・患者参加型カンファレンスを 186 件、看護を語る事例検討会 4 件（目標値 3 件）、倫理カンファレンス 2 件（目標値 3 件）、デスカンファレンス 4 件（目標値 2 件）、認知症カンファレンス 61 件実施した
 - ・褥瘡推定発生率 0.5%（目標値 0.5%）であった
 - ・看護を語る会 11 回（目標値 8 回）実施できた
 - ・「私の提案」108 件あり「おほめ」100 件、92.6%が高評価であった
 - ・倫理カンファレンス 94 件（目標値 4 回）実施できた
 - ・手術・告知・治療の場面に 14 回同席し意思決定支援を行い記録に残した
 - ・訪問看護介入患者数 45 名（目標値 40～50 名）、訪問延べ件数 200 件（目標値 180 件）実施できた
 - ・倫理カンファレンス 12 回（目標値 12 回）、デスカンファレンス 4 回（目標値 4 回）、ケースカンファレンス 12 回（目標値 12 回）予定通り実施できた
 - ・倫理カンファレンス 2 回（目標値 2 回）、接遇研修 13 人参加できた
 - ・定期的に身だしなみチェックを行うことにより身だしなみが常に整えられた
- 3) 多職種と連携し入退院支援を行う
- ・自宅退院患者の増加（47.4%から 62%）が図れた
 - ・退院調整カンファレンスを 152 例行うことが出来た
 - ・退院プロジェクトチームを病棟内に結成し、在院日数 5 日短縮に繋がった
 - ・多職種退院ケアカンファレンス実施率 23%（目標値 10%）、在宅復帰率 96%（目標値 95%）となった
 - ・看護連絡表を 2 部署、76 通作成し情報共有を行った

- ・退院調整カンファレンスやケアマネジャーと情報交換を行い在院日数 10.3 日（目標値 11 日）と短縮できた
- ・アロマを使用した緩和ケア月平均 5 件（目標値 4 件）実施できた
- ・看護連絡表に全て返信ができた（100%）
- ・入退院支援は関連部署と連携し 100%実施できた
- ・検査・治療の術前検査用紙を作成し、20 件の術前訪問ができた
- ・連携する事業所等 20 か所（目標値 20 か所）以上の面会を年 3 回以上（年 3 回）実施し顔の見える関係づくりに繋げた

4. 業務実績

	で き ご と
4 月	昇任 看護長 3 名 副看護長 6 名 主任 7 名 主査 17 名 <ul style="list-style-type: none"> ・一般外来 A B C と救急外来（内視鏡室・放射線科）D と分け看護長 2 名配置 ・口腔外科 主任看護師 1 名 主査看護師 1 名配置 ・令和 2 年度採用試験（1 次試験 33 名 25 名採用） ・学研 e ラーニング使用開始
5 月	<ul style="list-style-type: none"> ・ケアスタッフ入職オリエンテーション開始（2 日間・e ラーニング使用） ・合同会議（看護補助者ケアスタッフと協働するために） ・看護の日 5 月 10 日（血圧測定・健康相談・アロマトリートメント）
6 月	<ul style="list-style-type: none"> ・専任教諭養成研修会（6 月～2 月）後藤朋子・丸山楨絵 受講 ・市の看護師実務研修への協力（6 月～1 月） ・令和元年度病院事業計画のインターシップ募集開始 ・認定看護師課程「緩和ケア」櫻井直美「認知症ケア」島津健太・持田結香 入学 ・主任会（主任としての管理的視点を持ち人材育成を行う）
7 月	<ul style="list-style-type: none"> ・静岡県立看護専門学校 助産学科 2 名実習（7 月 22 日～8 月 16 日） ・日本看護協会「緩和ケア認定看護師」吉村康恵、「手術室認定看護師」松下賀津江、「訪問看護認定看護師」加藤浩子 3 名が取得 ・インターンシップ（5 名） ・第 101 回全国高等学校野球選手権静岡大会 富士球場 看護師派遣 6 名
8 月	<ul style="list-style-type: none"> ・高校生 1 日体験ナース 39 名 ・市立島田市民病院 救急外来看護体制視察（8 名）受入れ ・インターンシップ（19 名） ・男性看護師 12 日間育児休暇取得 ・高校生見学（2 名） ・吉原 1 中学職場体験（2 名）
9 月	<ul style="list-style-type: none"> ・認定看護師課程「救急看護」山田順一 入学

	<ul style="list-style-type: none"> ・「集中ケア認定看護師の特定行為研修」受講 佐野 世佳 ・インターンシップ（3名） ・入院（CS）セット導入開始 ・臨床スキンケア看護師認定臨床研修施設（日本創傷・オストミー失禁管理学会）となる
10月	<ul style="list-style-type: none"> ・静岡県立看護専門学校 助産学科2名実習（10月7日～12月13日） ・臨床スキンケア看護師認定臨床研修1名 ・NST 実地研修開始（静岡市立清水病院）10月～12月 神谷ちとせ ・静岡県専任教員養成講習会受講生臨地実習2名受け入れ（3B・3C） 10月10日～10月16日
11月	<ul style="list-style-type: none"> ・静岡県立看護専門学校 助産学科追加1名実習受け入れ11月5日～12月13日 ・岳陽中学職場体験（6名） ・吉原第3中学職場体験（6名） ・がんセンターCN 実習受け入れ（2名）11月19日～12月19日 ・臨床スキンケア看護師認定臨床研修1名
1月	<ul style="list-style-type: none"> ・新型コロナ感染症発生のため3D病棟運用開始（3B病棟へ外来C・OP・4Aより応援看護師3名配置する）
2月	<ul style="list-style-type: none"> ・7日より3D病棟コロナ感染症患者入院する（各病棟主任が中日勤・夜勤の応援として勤務する・ダイヤモンド プリンセス号乗客） ・18日より3B病棟40床で稼働する（泌尿器科患者10床5A・5B病棟へ入院） ・感染症外来（帰接外来）にて診察開始（外来看護管理者診察介助に入る） ・DMAT 出動要請あり出動する（看護師は派遣せず） ・合同会議（令和元年度看護部目標の反省） ・インターンシップ（9名）
3月	<ul style="list-style-type: none"> ・7日より面会制限開始 ・10日より正面玄関にて有熟者対応開始（サポート室看護師対応） ・インターンシップ（4名）途中中止とする ・看護部総会開催できず、書面を持って承認を得る（資料23日配布）

* 日本看護協会認定看護師

H18年度	村松由貴子	がん化学療法
H19年度	望月久子	手術看護
H22年度	若林久美子	皮膚・排泄ケア
H24年度	村松和歩	訪問看護
H24年度	加藤美奈子	慢性呼吸器疾患看護
H25年度	本間功武	感染管理

H26 年度	遠藤さよ子	認定看護管理者
H26 年度	佐野世佳	集中ケア
H28 年度	吉崎美帆	皮膚・排泄ケア
H30 年度	伊藤すみ子	認定看護管理者
令和元年度	松下賀津江	手術看護
令和元年度	訪問看護	加藤浩子
令和元年度	緩和ケア	吉村康恵

* 特定行為研修終了者

H30 年度	若林久美子	創傷管理関連・創部ドレーン管理関連 栄養及び水分管理に係る薬剤投与関連
令和元年度	佐野世佳	呼吸器（気道確保に係るもの）関連 呼吸器（人工呼吸療法に係るもの）関連 動脈血液ガス分析関連 栄養及び水分管理に係る薬剤投与関連 循環動態に係る薬剤投与関連

* 院内認定看護師

H25 年度	赤堀崇代	退院調整
--------	------	------

5. 令和元年度の看護部目標

「看護実践力と地域連携の強化」

行動目標

1. 専門知識と技術に基づいた看護の実践
2. 看護倫理に基づいた接遇の実践
3. 地域と連携した看護の実践

(文責 伊藤すみ子)

■外来

1 スタッフ

役 職	氏 名	役 職	氏 名
看護長	野澤 里美	看護長	渡邊 かおる
参事兼副看護長	田島 眞弓	参事兼副看護長	白井 さつき
副看護長	戸塚 美晴	副看護長	若本 奈緒美
副看護長	小林 宏美	副看護長	前嶋 良子
副看護長	加藤 珠永	副看護長	望月 敦子
副看護長（認定）	村松 由貴子	副看護長（認定）	若林 久美子
主任（認定）	吉崎 美帆	主任	仁藤 伸代
主任	小澤 花子	主任	佐野 かなえ
主任	大原 知子	主任	宇佐美 和代
看護師	78 名	准看護師	8 名
看護補助者	48 名		

2 所属の特色

外来は 23 科の一般外来と、通院治療室・人工透析室・内視鏡室・放射線科・救急外来で構成されている。内視鏡、放射線科では予定された検査・治療以外に、夜間休日など緊急時にも対応できる看護体制となっている。令和元年度は、内視鏡検査・治療 4900 件、放射線科では心臓カテーテル検査・治療 1244 件、その他血管造影 221 件が行われた。また救急外来では、地域の二次、三次救急を 24 時間体制で受け入れている。そのため、専門的知識・技術に基づく安全な医療が安心して受けられるよう努めている。

3 令和元年度目標および評価

目標「専門性を発揮し、地域へ繋げる看護の提供」

- 評価：1) 外来 ABC では接遇、スキンケア、泌尿器科環境調査、抗がん剤、新型コロナなどの勉強会を実施した。外来 D では小児シミュレーション 12 回、JPTEC 3 回実施し、専門知識・技術向上に繋がった
- 2) 意思決定支援を外来 ABC が 85 件／年、倫理カンファレンスを外来 C が 14 件／年、外来 D が 29 件／年実施し、優しく丁寧な対応を実践した
- 3) 病棟と外来では看護連絡票を 100%返信、救急外来と一般外来では電話対応患者の情報を共有、救急外来患者 9 名に対しては訪問看護師と連携し、看護を継続して在宅療養支援に繋がった

4 業務実績

- ・外来化学療法 1748 件／年（昨年比 332 件増加）実施した。初回説明、薬相談も開始し、各 102 件、316 件実施した
- ・皮膚・排泄ケア認定看護師による外来患者フットケア介入フローチャートを作成し院外にも周知し 84 件／年実施した
- ・内科外来の診察室を 1 室増設し対応した

・子宮動脈塞栓術マニュアルを作成し4件／年実施した

5 令和2年度外来目標

外来ABC「看護実践力を高め、患者・家族の思いを尊重した地域連携を強化する」

- 1) 専門知識と技術に基づいた安全な看護を実践する
- 2) 一人ひとりを大切にされた接遇を実践する
- 3) 多職種と協働し、患者・家族の思いを尊重した在宅療養支援を実践する

外来D「看護実践能力の向上と地域医療との連携強化」

- 1) 自ら学ぶ姿勢を高め、基準に沿った看護の実践
- 2) 第一印象を大切にされた接遇の実践
- 3) 地域と連携し二次救急医療を実践

(文責 秋山 ゆかり)

■手術室

1 スタッフ

役 職	氏 名	役 職	氏 名
看護長	森本 康江	参事兼副看護長（認定）	望月 久子
副看護長	伊藤 輝美	副看護長	杉本 祐介
主任	芦川 牧子	主任	山田 円
主査	10名（うち1名認定）	看護師	18名
委託（日本ステリ）	6名	委託（NHS）	4名

2 所属の特徴

当院手術室は、12科の手術を、看護師34名（日本看護協会 手術看護認定看護師2名を含む）で、年間36,757件行っている。増加する鏡視下手術や、昼夜を問わない緊急手術に対して安全な手術看護を提供している

3 令和元年度の目標及び評価

目標：手術室の専門知識と技術を深め、安全かつ円滑に手術を提供する

- 1) 勉強会を10回/年行い、院内外研修の伝達を12回/年行う
- 2) 倫理カンファレンスを4回/年行う
- 3) 年間手術運用を335件以上にする

評価：

- 1) 勉強会は年間11回実施し（チーム9回・管理1回・認定看護師1回）、伝達講習は、年間44件実施した。
- 2) 各チームでの倫理カンファレンスは94件実施した。そのうち3例は病棟カンファレンスで発表した。
- 3) 月間手術件数は304件で目標を下回った。

4 実務実績

- 1) 勉強会では各チームが主体的に企画、運営を行った。参加率は84.2%で、結果を看護に繋げた。
- 2) 倫理カンファレンス実施数は目標を大きく上回った。お褒めの言葉を年間7件頂き手術看護の評価ととらえ、モチベーションアップに繋げた

5 令和2年度の目標

目標：手術看護実践力の強化と安全な医療の提供

- 1) 勉強会を年10回実施する

- 2) 倫理カンファレンスとリスク事例共有を毎月行う
- 3) 術前カンファレンスを実施して、多職種と連携する

(文責 伊藤 輝美)

■中央材料室

1 スタッフ

役職	氏名	役職	氏名
看護長（手術室兼任）	森本 康江	参事兼副看護長	後藤 光子
委託（日本ステリ責任者）	眞田 真理子	委託（日本ステリ）	6名

2 所属の特色

中央材料室は、患者に安全な滅菌医材を提供するため、委託業者と協力し、院内で使用する医材の洗浄・消毒・滅菌業務（オートクレーブ・プラズマ）・EOG 滅菌外部発注と、病棟の検体や医材、伝票類、薬剤等の搬送業務を行っている

3 令和元年度の目標及び評価

目標 患者に安全な滅菌・消毒医材を提供する

- 1) 専門知識・技術の向上に努め、滅菌保証を高める
- 2) 委託業者と連携し、業務の効率化を図る

評価 1) 高圧蒸気滅菌器3台更新し、現在4台で同時稼働が可能であり、順調に医材の滅菌作業を行うことができた。EOG 滅菌を委託したことでスタッフの安全が確保できた。滅菌期限の検証結果から滅菌期限延長が可能となった

2) 毎日委託業者と情報・事例共有から業務改善に繋がった。また、滅菌期限延長により日切れ件数が減少し、定数調整したことで業務の効率化に繋がることができた

4 業務実績

- 1) 高圧蒸気滅菌器4台稼働により滅菌作業の向上と、EOG 滅菌委託外注日数を週3日から2日に減らしコスト削減できた。また、日切れチェックと見直しにより、医材の定数削減に繋がった
- 2) 一部の衛生材料の既製品化と滅菌期限延長により、滅菌パック3ヶ月が6ヶ月に、2重クルムで3ヶ月が2年と延長することができた。その結果日切れの減少に繋がり効率化を図ることができた

5 令和2年度の目標

目標 患者に安全で使い易い滅菌・消毒医材を提供する

- 1) 専門知識・技術の向上に努め、滅菌の質保証を高める
- 2) 委託業者、病棟、外来と連携し、業務の効率化を図る

（文責 伊藤 輝美）

■ ICU（集中治療室）

1. スタッフ

役 職	氏 名	役 職	氏 名
看護長	齋藤 幸子	副看護長	渡邊 葉子
副看護長	野澤 治	主任	小林 拓巨
主任	佐野 好美	主査	7名
看護師	12名	看護補助者	1名

2. 所属の特徴

稼働病床は6床で、令和元年度の入室患者数は353名、病床稼働率は82.5%であった。科別では、外科86名、循環器科(心臓血管外科を含む)130名、脳神経外科72名、内科56名、整形外科4名、泌尿器科3名、産婦人科2名であった。看護体制はモジュール型継続受け持ち方式で、他部門と連携・協働し高度な医療と、患者・家族に寄り添った看護が提供できるように努めている。

3. 令和元年度の目標及び評価

目標「チーム医療を推進し、安心・安全な質の高いクリティカルケアを提供する」

1) エビデンスに基づいたケアを実践する

病棟勉強会や急変時のシミュレーション、看護場面のリフレクションを行い知識・技術の向上に努めた

2) あらゆる場面において倫理問題に気付く力を養う

退室後訪問用紙を活用し、患者・家族の思いの共有や看護の振り返りを行った。また、医師と共に倫理カンファレンスを3回実施し倫理感性を深めた

3) 多職種連携を深め退院後の生活を見据えた看護を提供する

心臓外科の術前・術後カンファレンスを、医師・薬剤師・リハビリ・手術室・病棟看護師と共に全患者に実施した

4. 業務実績

1) 病棟勉強会7回、事例検討10例、看護場面のリフレクション8回、急変時のシミュレーション1回実施した

2) 急性期リハビリの運用基準を作成し活用した。定着率89%であった

3) 看護研究「ICU 面会時における看護師の対応に関する家族満足度調査～Molterの重症患者家族ニードを利用したアンケート調査～」に取り組んだ

5. 令和2年度の目標

目標「チーム医療を推進し、安心・安全な質の高いクリティカルケアを実践する」

1) 知識・技術を追求し、エビデンスに基づいた看護を提供する

2) 個々を尊重し、倫理場面に配慮した看護を提供する

3) 入院時から退院を見据えた多職種連携に努める (文責 松山 早登美)

■ 3 B 病棟

1. スタッフ

役職	氏名	役職	氏名
看護長	中村三千代	副看護長	諸星宮子
副看護長	田中秀樹	主任	尾崎悦子
主任	諸星美恵子	主査	3名
看護師	36名（臨時2名含む）	看護補助者	5名

2. 所属の特色

3 B 病棟は、脳神経外科・泌尿器科の混合病棟で一般病床51床と感染症病床6床を併設している。病気や障害とともに生きる患者・家族の思いに寄り添い、優しく丁寧な対応で個別性のある看護を提供し、患者の自立支援に努めている。また医師・看護師・コメディカルで行う多職種カンファレンスでは、医師の診療計画に基づき患者・家族の意思決定につなげる支援を意識して取り組んでいる。

3. 令和元年度の目標および評価

目標「患者・家族に寄り添った責任ある医療を提供する」

1) 専門知識・技術の向上に努める

研修は、5回以上/年/人 参加し自己研鑽に励んだ。また、管理研修とリンクさせ患者の退院指導・緩和ケアの知識向上に努めた

2) 互いに倫理観を高め合える職場環境を築く

倫理・デス・褥瘡に関するカンファレンスを毎週水曜に実施、定着にむけ活動した。倫理観に関する評価方法は、次年度の検討課題とする

3) カンファレンスの充実を図り、患者・家族の意思決定支援をする

泌尿器科患者の退院支援カンファレンスの充実を図った。さらに経営課の協力を得て、DPC適性入院期間を意識した支援が在院日数の減少につながった

4. 業務実績

1) 患者・家族参加型カンファレンス 20件/年

退院前カンファレンス実施回数の向上

2) 業務改善：感染症病棟の防護具装着手順と業務マニュアルの見直しを行った 新型コロナ感染症患者を受け入れている

5. 令和2年度の目標

「患者家族を尊重し専門性のある医療を提供する」

行動目標

1) 専門知識・技術に基づいた看護を提供する（感染防御）

2) 倫理観を高め看護の質向上に努める

3) カンファレンスの充実を図り、患者・家族の意思決定を支援する

（文責 中村 三千代）

■ 4 A 病棟

1 スタッフ

役職	氏名	役職	氏名
看護長	鈴木早苗		
副看護長	大井洋子	副看護長	久保田京子
主任	菅原早苗	主任	山下かずみ
主査（助産師）	4名	主査（看護師）	1名
助産師	16名	看護師	6名
臨時看護師	2名	看護補助者	3名

2 所属の特色

当院は地域周産期母子医療センターである。4 A病棟はベッド数 30 床の産婦人科病棟であり妊婦、産婦、褥婦及び婦人科疾患の患者が入院している。今年度は 546 件の分娩に対応した。スタッフは患者が満足できる看護及び分娩を心がけ、多職種と連携し入退院前後の支援に力を入れている。ファミリークラスでは、毎月「バースクラス」、立会い分娩希望夫婦対象への「ペアクラス」を開講し、産婦がバースプランに基づき満足できるお産となるように努めている。「助産ケアルーム」では妊婦健診、出産前の妊婦保健指導、出産後の母乳相談を行っている。産後うつ予防として助産師の産後 2 週間健診、宿泊型産後ケアの対応も行っている。

3 令和元年度の目標及び評価

目標「専門性のある質の高い看護を提供し、地域連携を強化する」

- 1) 確かな知識に基づいた看護を実践する
 - ・分娩時の出血時の対応、帝王切開看護、褥瘡予防などの勉強会を実施した
- 2) 1人ひとりが高い倫理観を持てる
 - ・毎日患者カンファレンスを行った。退院時のお褒めの言葉が 71 件あった
- 3) 多職種・地域の役割を理解し、患者に合わせた入退院支援を行う
 - ・薬剤師、ケースワーカーとの患者カンファレンスを週 1 回行った
 - ・サマリーを 171 件フィランセ及び他自治体に送り連携を図った

4 業務実績

- 1) NCPR シミュレーションを 35 回、勉強会は 9 回実施した
- 2) 倫理カンファレンス 57 件 ファミリークラス 35 回
 デスカンファレンス 4 件
- 3) 産後 2 週間健診 523 件 母乳外来 142 件

退院前カンファレンス 211 件

5 令和2年度目標

「ケアする力を高め、地域に繋げる看護の提供をする」

(文責 鈴木 早苗)

■ 4 B 病棟

1 スタッフ

役職	氏名		
看護長	齋藤 正美		
副看護長	渡邊 志津子	副看護長	持田 和美
主任	松山 桃代	主任	栗原 真由美
主査	6名	看護師	27名
看護補助者	3名		

2 所属の特色

4 Bは、小児科をはじめ整形外科、外科、耳鼻咽喉科など、15歳以下の乳幼児や学童期の患児が入院する34床と、新生児集中治療室（NICU）10床を有する小児病棟である。NICUでは富士医療圏のハイリスク新生児を受け入れ、高度な医療・看護を提供している。スタッフは「こどもの権利」を尊重し、患児・家族が安心して入院生活を送れるよう、丁寧な対応を心がけている

3 令和元年度の目標及び評価

目標「専門性を発揮し、地域に繋げる医療と看護の提供」

1) 専門知識・技術を深め、責任を持って看護を提供する

病棟勉強会を10回実施し、参加率は61.5%だった。インシデント事例の分析を行い再発防止対策を実施した

2) あらゆる場面で専門職として、倫理的に配慮し行動する

カンファレンスで看護の振り返りを行い、倫理的に配慮した行動がとれた。家族からのご意見用紙では97%が5の評価だった

3) 家族の思いに沿った退院支援を把握し、多職種と協働する

多職種と協働し、退院前カンファレンスや退院後訪問を実施した

4 業務実績

自主研究：花びら型プレパレーションツールを用いてプレパレーションを行った小児の反応と評価

5 令和2年度の目標

目標「チーム医療を強化して安心・丁寧な看護の提供」

1) 専門知識・技術を深め安全で質の高い看護の提供

2) 倫理的感性を高め合い思いやりのある看護の実践

3) 患児と家族に必要な退院支援

(文責 柘植 範子)

■ 5 A 病棟

1 スタッフ

役職	氏名	役職	氏名
看護長	秋山 ゆかり	副看護長	藤田 久美子
副看護長	富永 美保	主任	神谷 ちとせ
主任	鈴木 久美子	主査	7名
看護師	24名	看護補助者	4名

2 所属の特色

5 A病棟は耳鼻咽喉科・歯科口腔外科・婦人科・整形外科・神経内科の混合病棟である。幅広い看護ケアを日々実践するため定期的に勉強会を実施し知識技術の習得に努めている。患者・家族参加型カンファレンス（以下CF）を行ない、患者一人ひとりの思いに寄り添う看護を提供している。

3 令和元年度の病棟目標及び評価

目標「個々の看護実践力を高め多職種と連携・協働し退院後の生活を見据えた看護を提供する」

1) 専門的知識・技術に基づいた責任ある看護実践をする

スタッフに勉強会参加を勧め、病棟勉強会を10回/年実施し知識を深めた

2) 多職種CFの充実を図り倫理観を育成する

多職種CFを実施し、患者家族の思いを尊重すること人間としての尊厳について共有した

3) 入院時から多職種と連携して退院後の生活を考え計画的に支援する

退院プロジェクトチームを中心に病棟内リハビリを含む退院支援を推進した

4 業務実績

1) 患者・家族参加型CF 15件/月実施

2) 多職種で行う倫理CF 4件、デスCF 4件、認知症ケアCF 61件、看護を語る事例検討会 4件/年

3) 病棟勉強会：脳梗塞、視神経脊髄炎、口腔癌、退院支援における意思決定支援など10件/年（参加率61%）

5 令和2年度の目標

目標「看護実践力を高め、患者・家族の思いを尊重して地域連携を強化する」

1) 専門知識と技術に基づいた安全・安楽な看護を実践する

2) 患者、家族の人権・思いを尊重した接遇と看護を実践する

3) 入院時から多職種と連携し退院後の生活を見据えた支援を実践する

（文責 勝又 祐子）

■ 5 B病棟

1 スタッフ

役 職	氏 名	役 職	氏 名
看護長	松山 早登美	副看護長	遠藤 喜己子
副看護長	河合 利枝	主任	佐野 幸代
主任	奥之山 久美子	主査	4名
看護師	27名	看護補助者	5名

2 所属の特色

5 B病棟は、ベッド数 56 床の外科病棟である。消化器疾患や乳がんなどの周手術のほか、化学療法、緩和ケアなどを目的とした患者が多く入院している。専門的な知識を求められるため、私たちは知識・技術の向上に努め、患者が安心して入院生活を送ることができるよう質の高い看護の提供を目指している。

3 令和元年度の病棟目標及び評価

「専門知識・技術を活用し、患者・家族を支える看護を提供する」

1) 専門知識・技術を追求し看護実践につなげる

スタッフへの研修参加を勧め、全スタッフが 8 回／年以上参加した。褥瘡ケア、ストーマケア、緊急内視鏡の勉強会などを実施し実践に活かしている。

2) 社会的責任を自覚し、誠実な対応をする

倫理カンファレンスとデスカンファレンスを 24 回／年行い、看護の振り返りを行った。また、看護を語る会を 11 回／年実施し、自分の言葉で私が考える看護を確認し実践に活かす取り組みを行った。各チームでマナー勉強会を実施し 16 件／年間のお礼状とご意見があった。

3) 多職種と協働し継続した看護を提供する

患者参画型カンファレンスの実施と多職種との連携を図り、入退院支援を行った。また、看護連絡表を作成し外来と情報を共有し看護の継続を図った。

4 業務実績

自主研究をストーマケアと緊急内視鏡に関するテーマで 2 グループが活動し実践に活かした。また、看護補助者に対して教育プログラムを作成し実施した。

5 令和 2 年度の目標

「専門知識・技術を高め患者・家族の意思決定支援を支える看護を提供する」

1) 専門知識・技術を追求し、根拠に基づいた看護を提供する

2) 倫理感性を高め誠実な看護を提供する

3) 多職種・地域医療と連携し患者・家族の意思決定を支援する

(文責 渡邊葉子)

■ 6 A 病棟

1 スタッフ

役職	氏名	役職	氏名
看護長	芳野 由規子	副看護長	渡邊 志津子
副看護長	石川 裕子	主任	原村 ゆき子
主任	伊賀 尚美	主査	7名
看護師	30名	看護補助者	4名

2 所属の特色

6 A 病棟は、血液疾患・内分泌・代謝系疾患の内科病棟である。無菌室2床が設置されており、化学療法とその看護を行っている。糖尿病患者に対しては、教育プログラム則り正しい知識の習得と自己管理をサポートしている。患者・家族の思いに沿った看護が提供できるように多職種と協働し地域とつながる看護の提供に努めている。

3 令和元年度の目標及び評価

目標「看護の専門性を高め、入退院を充実させ地域と連携する」

行動目標 1) 専門知識を深め責任ある看護を提供する

2) 倫理に配慮した看護が実践できる

3) 多職種と共に患者・家族の思いに沿った退院支援が実践できる

評価 1) 計画的に勉強会を11回開催することができた。全スタッフが院内外の研修に6回/年参加することができ専門的な知識を身につけることができた

2) 倫理カンファレンスを8回/年実施したことで倫理に関する問題について掘り下げて考えることができています

3) 多職種で退院調整カンファレンスは2回/週に継続でき患者・家族の意向に沿った退院調整ができた

2) 倫理カンファレンスを8回/年実施したことで倫理に関する問題について掘り下げて考えることができています

3) 多職種で退院調整カンファレンスは2回/週に継続でき患者・家族の意向に沿った退院調整ができた

に沿った退院調整ができた

4 業務実績

1) ウォーキングカンファレンスが定着し、安全管理の意識が高まりチームで情報が共有できている

2) 院内学術集会で「倫理カンファレンスについて」発表する。倫理に関するについて掘り下げて考えることができています

5 令和2年度の目標

目標「看護の専門性を高め、入退院支援を充実させて地域と連携する」

1) 専門知識を深め責任ある看護を提供する

2) 倫理に配慮した看護が実践できる

3) 多職種と共に患者・家族の思いに沿った退院支援が実践できる

(文責 芳野 由規子)

■ 6 B病棟

1. スタッフ

役 職	氏 名	役 職	氏 名
看護長	小林 由美	副看護長	望月 真理
副看護長	東川 真理	主任	渡邊 弘江
主任	西崎 金苗	主査	5名
看護師	27名	医療補助	5名

2. 所属の特色

6 B病棟は、腎臓・呼吸器系の内科病棟で、腎臓内科では血液透析・腹膜透析などの検査・治療、呼吸器内科は呼吸不全や肺炎などの検査・治療を行っている。腎臓内科では食事療法や治療の継続が必要なことがあり、自分らしい生活が送れるよう指導している。呼吸器内科では人工呼吸器の管理や在宅酸素療法を必要とされる患者への支援を行い安心安全な看護の提供を実践している

3. 令和元年度の目標及び評価

目標：多職種との連携を深め安全で安心できる医療の提供

行動目標

- 1) 専門的知識・技術を深めるよう年間 15 回の勉強会を実施する
- 2) 倫理カンファレンスを年間 12 回実施し倫理的配慮ができるようにする
- 3) 退院調整を多職種と共に実施し患者家族の満足に繋げる

評価 1) 勉強会は年間 19 回開催し予定以上であった。また、急変時のシミュレーション 3 回防災訓練も 3 回実施した

- 2) 倫理カンファレンスを年間 12 回実施し、退院前カンファレンス 4 回実施することで倫理感性を高めた。また、退院前カンファレンスを年間 22 回実施し情報共有したことで個別性のある看護実践に繋げることができた

4. 業務実績

- 1) 事例検討：倫理カンファレンス年 12 回、デスカンファレンス年 4 回、認知症カンファレンスを 6 回実施
- 2) 病棟勉強会：腎疾患・透析療法・呼吸器疾患・人工呼吸器の取り扱い・看護ケアについてなどの勉強会を年 19 回実施した
- 3) 退院調整カンファレンスは毎週 1 回実施することができた

5. 令和 2 年度の目標：多職種との連携を強化し、優しく安全な医療の提供

- 1) 年間 20 回実施し、専門的知識・技術を深める
- 2) ケースカンファレンスを年間 20 回実施し、接遇の実践をする
- 3) 意思決定支援を実施し、多職種津共に患者・家族の満足に繋げる

(文責 小林 由美)

■ 7 A 病棟

1 スタッフ

役 職	氏 名	役 職	氏 名
看護長	遠藤 里花	副看護長	滝澤 佐織
副看護長	増田 満伯	主任	新名 美佐子
主任	齋藤 薫美	主査	5名
看護師	28名	医療補助員	5名

2 所属の特色

7 A病棟は、循環器内科・心臓血管外科及び、結核病床 10 床を含む病棟である。入院患者は、心臓カテーテル検査・治療を目的として緊急入院される患者も多い。患者が安全に安心して入院生活を過ごせるよう 24 時間心電図モニターを観察し、緊急時には専門的知識に基づき適切な看護を実践している。更に定期的な勉強会や研修に参加し得た知識・技術を活かし信頼される医療を提供できるよう努めている。

3 令和元年度の目標及び評価

「多職種と協働し、個別性を重視した専門的看護を提供する」

1) 知識・技術の向上を図り実践に繋げる

院内研修に平均 8.6 回/年、院外研修に平均 1.6 回/年参加した。勉強会を計画し 7 回/年実施した。専門的知識・技術を深めることで根拠ある実践に繋がった

2) 倫理面に配慮した対応に努める

倫理カンファレンスを 12 回/年実施した。またデスカンファレンスや認知症カンファレンスを通して患者・家族との関わりを振り返り倫理観の向上が図れた

3) 多職種と連携を図り退院支援を推進する

多職種カンファレンスを定着させることで、退院支援に対する個々の意識が高まり、積極的な退院支援が進められた

4 業務実績

- ・ 院内学術集会：「緊急体外式ペースメーカー挿入時の介助に向けたシミュレーション教育」について発表
- ・ 安全管理・OJT・患者参加型カンファレンスを目的にウォーキングカンファレンスを開始した

5 令和2年度の目標

「専門性と多職種連携を強化し個々を尊重した医療を実践する」

- 1) 知識・技術を深め専門性の高い医療を実践する
- 2) 倫理・接遇に配慮した対応に努める
- 3) 多職種と連携を図り退院支援を推進する

(文責 遠藤 里花)

■ 7 B 病棟

1 スタッフ

役 職	氏 名	役 職	氏 名
看護長	勝又 祐子	副看護長	勝亦 由美
副看護長	風早 祥	主任	佐野 陽子
主任	渡辺 まゆみ	主査	5名
看護師	26名	医療補助	6名

2 所属の特色

7 B 病棟は消化器内科病棟で主に肝臓や胆道系の疾患、胃・腸・膵臓などの消化器疾患の患者が入院している。患者は、超音波による肝生検・ラジオ波熱焼灼療法や内視鏡による治療など最先端治療を受けている。病棟看護師は、夜間・休日の緊急内視鏡の介助も担っている。看護体制は固定チームナーシングで、患者の気持ちに寄り添い、きめ細かな対応で最善の看護を提供している。

3 令和元年度の目標及び評価

病棟目標「専門知識と技術を高め地域と連携し、心のこもった看護の提供」

- 1) 消化器内科の知識・技術を深め、責任ある看護を提供する
消化器内科に関する勉強会を毎月計画的に実施し、知識・技術を深め、責任ある医療を提供することができた
- 2) あらゆる場面で倫理的に配慮した対応ができる
倫理綱領の勉強会では4分割法を用いて分析し、実践の場で倫理的に配慮した対応をすることができた
- 3) 多職種と連携を密にし、入退院支援の充実を図る
多職種と連携し退院調整カンファレンスを週1回実施した。退院支援シートを活用し早期から退院支援に繋げることができた

4 業務実績

- 1) 緊急内視鏡検査に対応できるようシミュレーションの勉強会を行い、夜間・休日の緊急内視鏡の発生時に対応することができた
- 2) 褥瘡対策ケアカンファレンスを実施し、新規褥瘡発生の予防・早期発見に繋げ対応することができた

5 令和2年度の目標

病棟目標「専門知識と技術の向上に努め、地域と連携し信頼される看護の提供」

- 1) 消化器内科の知識・技術を深め、安全な看護を提供する
- 2) 接遇力を高め、倫理的に配慮した対応をする
- 3) 多職種と連携し、患者・家族が満足できる入退院支援をおこなう

(文責 東川 真理)

■ 3 C病棟

1 スタッフ

役職	氏名		
看護長	柘植 範子		
副看護長	齋藤 洋実	副看護長	小林 二十美
主任	本多 すみ江	主任	野畑 圭子
主査	7名	看護師	24名
看護補助者	5名		

2 所属の特色

3 C病棟は、整形外科・形成外科・眼科・皮膚科の混合病棟である。疾患の特徴上、身体機能の障害を持つ患者が多いため、患者を生活の視点で捉え、基本的な日常生活援助を安全で丁寧に提供できる。また 90%以上の患者にクリニカルパスを使用しており、診療や看護を患者と共有できる。また大腿骨地域連携パスを使用して地域の病院と連携している

3 令和元年度の目標及び評価

目標「多職種と連携し、安全で確実な看護を丁寧に提供する」

- 1) 各科の知識と技術を習得し看護の質を向上する
- 2) 患者を尊重し個々の患者に合わせた看護を実践する
- 3) カンファレンスを充実し患者の希望沿った連携をする

4 業務実績

目標値	1. 整形外科在院日数 20 日	19.4 日
	2. 自宅退院整形外科患者数 50%以上	57%
	3. 身体拘束患者 1 人当たりの日数 11 日	11 日
	4. 転倒転落インシデント 30 件	31.4 件
	5. 転倒転落インシデント 3b 以上 0 件	0 件

5 令和2年度の目標

目標「多職種と連携し、個別性のある丁寧な看護を提供する」

- 1) 専門的知識と技術を習得し、安全な看護を実践する
- 2) 患者個々を大切にされた看護を提供する
- 3) 患者・家族の思いを尊重し、カンファレンスに反映させ他職種と連携する

(文責 齋藤 洋実)

■病院経営課

1 スタッフ

役 職	氏 名	役 職	氏 名
事務部長	大沼 幹雄	課長	芹澤 広樹
経営企画担当調整主幹	金子 弘之	経営企画担当主幹	木内 啓人
経営財務担当主幹	宇佐美 雄二	主査	角入 あゆ美
上席主事	小池 博也	上席主事	清水 涼真
参与（R）	杉沢 利次	事務補助員（R）	志田 奈穂子
事務補助員（R）	前田 幸毅		

（R）は臨時職員

2 令和元年度の業務実績

<業務>

病院経営課は「病院経営の健全化を推進するため、経営分析及び経営改善を行う」、「病院の機能改善を推進するため、各種施策の企画立案と調整、病院職員の適正配置を行う」、「病院事業の予算を編成、執行を管理し、決算の調製を行い、資金計画を策定し管理する」の主要事業があり、以下の5事業を所管している。

- （1）中央病院経営健全化推進事業
- （2）中央病院機能改善推進事業
- （3）中央病院予算編成執行・会計決算調製事業
- （4）中央病院会計出納管理事業
- （5）部内調整事業

<実績>

経営企画担当では、経営改革推進委員会の事務局として、第三次中期経営改善計画の実効性を高めるため、令和元年度事業計画書を策定し、各項目に対する具体的な取組内容を院内周知するとともに進捗管理を行った。

経営財務担当では、平成30年度決算書及び令和2年度予算書の調製を行った。

3 来年度の課題

経営企画担当では、第三次中期経営改善計画の事業計画の進行管理に取り組むとともに、新規事業に関する院内調整を図る。

また、老朽化が進む病院施設の建替えに向けた検討を進める。

経営財務担当では、予算・決算の調整を行うとともに、予算の適正な執行管理を行う。

（文責 芹澤 広樹）

■病院総務課

1 スタッフ

役 職	氏 名	役 職	氏 名
課長	渡辺 利英	総務担当統括主幹	伴野 晃仁
人事担当統括主幹	鈴木 裕子	施設物品担当統括主幹	原田 誠
総務担当主幹	秋山 英希	人事担当主幹	佐野 昌哉
施設物品担当主幹	堤 恭子	主査	杉山 満利
主査	井出 大介	主査	小山 修一
上席主事	守屋 良紀	上席主事	中村 崇人
上席主事	佐山 侑希	上席技師	岩間 雄一郎
主事補	市川 恵未	医師人材監 (R)	西田 英明
業務員 (R)	加藤 猛	業務員 (R)	大石 昌男
事務補助員 (R)	松井 みゆき	事務補助員 (R)	坪井 美千代
事務補助員 (R)	佐野 友理子	業務員 (R)	脇田 嘉訓

(R) は臨時職員

2 令和元年度の業務実績

病院総務課の業務は、病院運営を円滑に進めるための管理事業を主な事業としている。総務担当、人事担当、施設物品担当の3担当を構成し、総務担当は病院全体の庶務・開設許可事項等の許認可申請、人事担当は人事・福利厚生関係、施設物品担当は施設整備や物品購入を主な業務としており、以下の13事業を所管している。

- | | |
|--------------------|------------------|
| (1) 中央病院運営事業 | (2) 中央病院事務管理事業 |
| (3) 中央病院人材活用事業 | (4) 中央病院勤務条件整備事業 |
| (5) 中央病院給与支給事務事業 | (6) 中央病院職員福利厚生事業 |
| (7) 中央病院安全衛生管理事業 | (8) 中央病院職員研修事業 |
| (9) 中央病院市有財産管理事業 | (10) 中央病院環境整備事業 |
| (11) 中央病院院内保育所運営事業 | (12) 中央病院施設管理事業 |
| (13) 中央病院防災対策事業 | |

3 来年度の課題

引き続き、医師をはじめとした医療従事者の確保に取り組むとともに、高度で専門的な医療を提供するため、職員の人材育成に努めていく。

施設及び設備については、維持管理を適切に行い、施設機能の保持に努めていく。

災害対策事業は、災害拠点病院としての基盤強化を目的に、富士市地域防災計画等に基づく訓練の実施、富士市立中央病院地震防災計画の見直し、災害対策用設備及び資機材等の配備を計画的に進めていく。

(文責 渡辺 利英)

■医事課

1 スタッフ

役 職	氏 名	役 職	氏 名
課長	玉舟 正弥	診療録管理事業 (R)	木村 知佳
医事担当統括主幹	寺田 和子	診療録管理事業 (R)	寺尾 由梨香
医事担当主幹	岡本 功	診療録管理事業 (R)	菊地 美穂
医事担当上席主事	川本 悦子	手術室代行入力 (R)	河野 あかね
医事担当主事	川口 愛美	システム管理 (R)	赤池 春香
医事担当主事	高田 恭平	医師事務作業補助者 (R)	芦澤 典子
診療情報担当統括主幹	塩澤 忠生	医師事務作業補助者 (R)	飯塚 有紗
診療情報担当主幹	露木 秀俊	医師事務作業補助者 (R)	生駒 久美子
主査 (診療情報管理士)	島田 英介	医師事務作業補助者 (R)	内田 裕子
上席主事 (診療情報管理士)	齋藤 智恵美	医師事務作業補助者 (R)	佐野 秀美
主事補 (診療情報管理士)	白石 一希	医師事務作業補助者 (R)	佐野 由美子
主事補 (診療情報管理士)	石田 佳奈	医師事務作業補助者 (R)	清水 みどり
渉外室長 (R)	加藤 裕司	医師事務作業補助者 (R)	高田 菜摘
渉外担当 (R)	望月 加津典	医師事務作業補助者 (R)	高室 まゆみ
通訳 (R)	鈴木 智美	医師事務作業補助者 (R)	橋谷 理恵
事務補助員 (R)	柴崎 香苗	医師事務作業補助者 (R)	古郡 直美
事務補助員 (R)	守屋 理恵	医師事務作業補助者 (R)	望月 美佐
診療録管理事業 (R)	市川 もと枝	医師事務作業補助者 (R)	望月 美咲
診療録管理事業 (R)	阪藤 千晶	医師事務作業補助者 (R)	原田 祐紀
診療録管理事業 (R)	小林 朱美	医師事務作業補助者 (R)	山田 美保
診療録管理事業 (R)	西川 麻衣		
診療録管理事業 (R)	藤原 真里子		

(R) は臨時職員

2 令和元年度の業務実績

医事担当は、患者に良質な医療及びサービスを提供するための受付等の窓口事務と診療報酬の請求、診療情報担当においては、医療情報システムの管理運用、診療記録・医学情報管理、統計資料の作成による病院事業の多面的な分析等を主な業務としており、以下の8事業を所管している。

- | | |
|----------------------|----------------------|
| (1) 中央病院窓口事業 | (2) 中央病院外国人患者対応事業 |
| (3) 中央病院診療報酬請求事業 | (4) 中央病院診療録管理事業 |
| (5) 中央病院医事統計資料作成管理事業 | (6) 中央病院医師事務補助事業 |
| (7) 中央病院情報システム管理事業 | (8) 中央病院 I C T 化推進事業 |

教育・研修

医事課では、診療情報管理士が専門職としての質の向上を目指し、院外研修へ積極的に参加した。

診療情報管理士研修

開催日	研修名	開催地
5月25日	静岡医療 IT 利活用懇話会	掛川市
6月25日	がん登録実務者初級認定者研修	東京都
8月31日	DPC マネジメント研究会学術大会	東京都
9月14日	静岡県院内がん登録実務者研修会	浜松市
9月19-20日	日本診療情報管理学会 学術大会	大阪府
11月23日	診療情報管理士生涯学習研修会 ICD11 研修会	東京都
12月21日	愛知県院内がん登録研修会	愛知県
1月18日	DPC マネジメント研究会学術大会	東京都
2月13日	【MDV】ユーザ会セミナー「2020年度診療報酬改定の概要」	東京都

3 来年度の課題

令和2年度診療報酬改定の項目を精査し、各部門と連携を図り、現行の施設基準を維持しながら、新規施設基準の取得に努める。

診療情報担当においては、医師の「働き方改革」の一環である事務的作業の軽減と効率化を目的として、医師事務作業補助者の業務改善による更なる有効活用に向けて検討を行う。

(文責 玉舟 正弥)

■地域医療連携センター

1 スタッフ

役 職	氏 名
センター長	遠藤 さよ子

〔地域医療連携室〕

役 職	氏 名	役 職	氏 名
室長兼看護長	小野田 智恵子	統括主幹	岩垣 哲也
副看護長	赤堀 崇代(*1)	看護師	加藤 浩子(*2)
看護師	中野 友美	看護師	高澤 美代
看護師	竹川 裕香	看護師	齋藤 香須美
看護師	浅沢 美由樹	MSW	佐藤 理絵
MSW	遠藤 卓馬	MSW	前嶋 真理子
専門員	村松 和歩(*3)	専門員	渡辺 野利江(*4)
事務補助員(R)	中井 美里	看護補助員(R)	佐野 順子

(*1)院内認定退院調整看護師 (*2)訪問看護認定看護師 (*3)在宅看護専門看護師 (*4)在宅医療・介護連携コーディネーター

〔患者サポート室〕

役 職	氏 名	役 職	氏 名
室長兼看護長	大塚 君子	副看護長	渡邊 裕子
主幹	小林 真紀子	主幹(MSW)	江村 宏子
専門員	勝山 弘子	専門員	佐野 まりこ
看護師(R)	佐藤 美智子	看護補助員(R)	松下 治美
看護補助員(R)	濱田 ひろみ	事務補助員(R)	佐野 美華

2 令和元年度の業務実績

〔地域医療連携室〕

目標：安心して地域で暮らせる支援を提供する

- 1) 患者・家族の意向に寄り添った在宅支援・退院支援を実践する
- 2) 専門性を活かし、多職種連携の充実を図る
- 3) 高度医療機器・紹介患者診療予約の利用推進

評価：

各職種が専門性を発揮、協働、連携し、患者・家族の意向に寄り添った支援を実践した。地域の会議・研修への参加や地域医療連携部会の開催により地域連携の充実を図った。また、高度医療機器・紹介患者予約枠の利用状況を医師会に提示し、利用の推進に努めた。

実績：

	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
退院調整スクリーニング件数	6,304	6,298	7,021
退院調整患者数	1,830	1,994	2,321
訪問看護実患者数	74	74	101
延べ訪問看護回数	1,816	1,826	2,355
在宅医療・介護相談件数	-	64	148
高度医療機器共同利用数	1,815	1,795	1,856
紹介患者予約枠利用件数	3,515	3,748	3,661

[患者サポート室]

目標：患者・家族が安心して医療が受けられる様、多職種との連携を強化し、それぞれの専門性を発揮した質の高い支援を提供する。

- 1) 患者・家族及び他施設からの様々な問題、悩み等の事例を共有し対応力を高める
- 2) 入院前支援の拡充を図る
- 3) がんサロンの参加者を増やす

評価：

他施設からの要望や患者からの相談内容を、総合相談検討会（毎週）及びチーム会（1回/2カ月）で共有、問題事例は検討し、最善な対応に繋げることができた。入院支援においては、9月から泌尿器科の対象症例を拡大したことで入院時支援加算件数の増加に繋がった。また、がんサロンは、4月から2月まで毎月実施（3月は、COVID-19感染拡大防止のため中止）し、参加者は月平均4.5名であった。

実績：

	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
総合相談件数	18,276	16,413	13,196
入院時支援加算件数	123 (11月～)	413	456
がんサロン参加人数	5.2/月	3.8/月	4.5/月

3 来年度の目標

[地域医療連携室]

目標：安心して地域で暮らせる支援と連携を強化する

- 1) スタッフ個々が専門性を発揮し、多職種連携を強化する
- 2) 患者・家族に寄り添った支援を丁寧実践する
- 3) 地域とのかけ橋となり、切れ目のない看護を実践する
- 4) 開業医訪問等により、紹介率向上につなげる

(文責 齋藤 正美)

〔患者サポート室〕

目標：地域連携を強化し、それぞれの専門性を発揮した質の高い支援を提供する

- 1) 相談員のスキルアップを図り、患者・家族に適切に対応する
- 2) 患者の意思を尊重した入院前支援を実践する
- 3) 他院からのファックス紹介・高度医療機器の申し込みに対し、スムーズな対応を図る

(文責 小野田 智恵子)

■医療安全対策室

1 スタッフ

役 職	氏 名
医療安全対策室長（副院長）	諸岡 暁
専従リスクマネジャー（副看護部長）	北島 美鈴
メンバー（兼務）	15名

2 令和元年度の業務実績

1) インシデント・アクシデントレポートの集計、分析

年 度	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
報告件数	2,730	3,201	3,648

2) 医療安全相談

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
相談数	0	1	0	1	1	1	0	1	1	0	0	1

3) 医療安全研修

- ・第1回「大規模災害発生時の対応＜病院職員の基本的知識＞」 6回開催
- ・第2回「医療機関における事故発生時の法的責任と事故対応」 3回開催

4) 医療安全関連講義

- ・看護部講義 7回
- ・看護師実務者研修講義 1回（市役所依頼）
- ・市立看護学校講義 6回

5) 医療安全情報

- ・院外からの医療安全情報を関係部署に配布し、情報の提供と周知

6) 改善事項

- ・「無断離院患者対応マニュアル」作成
- ・「患者搬送時の酸素ボンベ取り扱い基準」作成

7) 医療安全活動

- ・医療安全推進週間（令和元年 11月 24日～11月 30日 「誤薬防止」をテーマに全職員に標語を募集し 381 作の応募があった。最優秀標語を 11 月中全職員が名札に入れることで医療安全の意識高揚に努めた
- ・医療安全地域連携相互評価の実施（富士・富士宮地区 8 施設対象）
- ・「救急カート管理マニュアル」にそって、巡回を実施
- ・各部署に「5 R および指差し呼称の確認」巡回の実施

8) 医療安全対策室たより発行（12回）

- ・看護部の部署別種類別報告数を一覧表にし、コメントを付けて看護部リスクマネ

ジメント担当委員会で配布した

9) 各委員会、各部署への依頼および啓蒙

- ・各担当医師に、放射線・病理未読レポート状況の説明
- ・薬剤科に、「ボスミン注とアドレナリン注製剤について」を注意喚起の依頼
- ・看護部に、「採血時・ルート抜去時、ガーゼ止血の廃止」依頼
- ・総務課に、「転倒事故防止」のため、駐車場整備の依頼
- ・医事課に、「宛名間違い防止」のため、紹介登録の運用基準の作成依頼
- ・医事課に、「死後 CT 依頼方法及び費用」の啓蒙依頼
- ・手術室運営委員会に、「全身麻酔患者の帰室時は医師同行の義務付け」の依頼
- ・臨床工学科に、看護部に対し輸液ポンプの勉強会の依頼

3 来年度の課題

医療事故調査制度に伴い、医療に関する患者・家族の疑問の増加が考えられる。医療安全相談に応じ軽減に努める

職員の医療安全に対する意識が高くレポートを報告する風土が出来ている。薬剤製剤は5 R 関連の報告減少（未然に発見は除く）をめざし、転倒転落は医療者が関与しているの転倒重症事例ゼロを目指し活動する

<活動内容>

- ・インシデントレポート事例の改善依頼後の確認
- ・医師からのインシデントレポート提出件数を全体の1割をめざす
- ・救急カート、タイムアウト、深部静脈血栓症（DVD）マニュアルの遵守確認

（文責 諸岡 暁）

■院内感染対策室（ICT）

1 スタッフ

役職	氏名	役職	氏名
室長	後藤 博一(副院長兼総括部長兼泌尿器科部長兼感染対策室長)	メンバー	本間 功武(感染対策専従看護師) 他 18名

2 令和元年度の取組実績

- (1) ICT 定例会 12回（毎月1回、第4水曜日）
- (2) 耐性菌対策評価ラウンド（毎週火曜日）
- (3) 院内感染対策室（ICT）によるラウンドを実施

ICT ラウンドは毎週水曜日に実施した。ラウンド時に手指衛生の遵守を指導し、年間の手指衛生指数は 19.89 となり昨年度より 2.904 ポイント上昇した。それに対し、MRSA 分離率は 4.21 となり 0.3 ポイント下降した。

今後も適切な指導と職員一人ひとりが標準予防策を意識できるようラウンドを実施していく。その他にも耐性菌（MRSA・MDRP）ラウンド、耐性菌対策評価ラウンド、血流感染ラウンドを実施した。



(4) ICT 主催による職員対象感染対策研修会の開催

①内 容：「事例から学ぶ職業感染対策 ～針刺し・皮膚粘膜暴露の対策～」

開 催 日：令和元年 11 月 1 日（金）

令和元年 11 月 13 日（水）

令和元年 11 月 14 日（木）（DVD 上映）

令和元年 11 月 20 日（水）（DVD 上映）

令和元年 11 月 21 日 (木) (DVD 上映)

令和元年 12 月 3 日 (火) (DVD 上映)

講 師：感染管理認定看護師 本間功武

参加人数：647 人

②内 容：「病院施設における環境整備と当院の *C. difficile* 対策」

開 催 日：令和 2 年 3 月 10 日

令和 2 年 11 月 12 日 13 日 18 日 24 日 (DVD 視聴)

講 師：杏林製薬株式会社 医療環境管理士 松内一樹

感染管理認定看護師 本間功武

上記の予定で実施する予定であったが、新型コロナウイルス感染症にて開催中止となった。講義予定の資料を配布しアンケートを実施した結果は 832 名 (回収率 88.8%) であった。

(5) 感染対策地域連携カンファレンスの開催【全 4 回実施】

4 施設の感染防止対策加算 2 取得医療機関【川村病院、湖山リハビリテーション病院、富士整形外科病院、大富士病院】と連携し、感染防止技術の向上や最新知見の周知に貢献した。

カンファレンス開催日時

① 令和元年 5 月 29 日 (水) 18 時より 中央病院 (第 2 会議室)

② 令和元年 8 月 28 日 (水) 18 時より 中央病院 (第 2 会議室)

③ 令和元年 11 月 27 日 (水) 18 時より 中央病院 (第 2 会議室)

④ 令和 2 年 2 月 26 日 (水) 新型コロナウイルス感染症にて資料配布をもって開催とした。

(6) 感染防止対策地域連携加算を取得し共立蒲原総合病院、富士宮市立病院との相互評価を実施

①令和元年 11 月 13 日(水) 富士市立中央病院の評価 共立蒲原総合病院が来院

②令和元年 11 月 26 日(火) 富士宮市立病院の評価 富士市立中央病院が訪問

(7) サーベイランスの実施

①検出菌サーベイランス【JANIS】

②SSI サーベイランス【JANIS】

③ICU サーベイランス【JANIS】

④手指衛生指数サーベイランス

⑤血流感染サーベイランス

(8) 感染症診療に対する対策

保健所と連携を密にして MERS 疑いや麻疹・風疹疑い症例・新型コロナウイルス感染症に対し適切な感染防止対策を実施し診療した。

3 来年度の課題

2019 年 7 月から AST（抗菌薬適正使用支援チーム）を立ち上げ、カルバペネム系抗菌薬投与開始 1 週目で介入した。カルバペネム系 AUD は昨年度と比較し、使用人数は 181 名減少し、AUD は 18.75 ポイント減少した。抗菌薬投与後も菌検査で難治症例も抗菌薬の変更、de-escalation が積極的に検討されている症例が多く見られた。

院内で検出されている全ての耐性菌に対し抗菌薬の使用状況と医師からの抗菌薬に関するコンサルテーションを受けることができるよう整備していく。職場の環境改善と感染防止策の遵守率向上を図り、医療関連感染の発生低減に努める。さらに、最新知見を導入したマニュアルを再考し、効率的かつ確実な感染防止策を導入する。

サーベイランスを継続し、感染症の発生やその原因菌に関するデータを継続的に収集・分析し、必要な対策を講じ当該部署にフィードバックする。また、近隣施設からの相談等にきめ細かく応じ、地域医療の向上に貢献していく。

(文責 後藤 博一)